筑波大学新聞

第324号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福原直樹
TEL:
029(853)2040・6699
E-mail
shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

5人に1人が交通違反

自転車走行中 イヤホン、信号無視

本紙計測

筑波大学周辺の道路で自転車の通行状況を本紙が計測した結果、約5人に1人が信号無視や無灯火など交通ルールを違反していたことが分かった。学生生活課によると、今年4～9月の間に発生した筑波大生が関わる交通事故のうち、自転車走行中の事故が最も多く、つくば中央署は学生に注意を呼びかけている。（油布知夏＝人文学類3年、新田萌夏＝社会学類3年、写真も。3面に関連特集）

違反者1000人超

調査は10月13―16日の4日間、1日3回1時間実施。筑波大生が多く通行する天久保3丁目のローソン前の交差点付近と、同3丁目のミニストップ前の交差点付近で、信号無視や二人乗り、傘差し運転などの交通違反をしている自転車の数を計測した。

その結果、違反していたのは4918人中1089人。ほとんどが筑波大生と見られ、一番多かった違反行為はイヤホンやヘッドホンで音楽を聞きながらの運転で、計427人だった。特に朝の時間帯に多く、どちらの計測地点でもほぼ同数の違反者が見られた。

次に信号無視が多く、計200人が違反。ローソン前交差点がほとんどで、1時間あたり20人以上が信号無視をするケースが続いた。

自転車運転中イヤホンで音楽を聴いたり（上）、スマホを使う学生（下）（10月26日、天久保3丁目のローソン前交差点で）※ 画像を一部加工しています

16日の朝は小雨が降り、午前8時～9時に通った598人のうち53人が傘差し運転していた。また、傘を差していなくても、閉じた傘を片手に持ったまま運転するなど、危険な運転をしている人が多かった。

自転車は軽車両に分類されるため、各都道府県の定める道路交通法施行細則に従う必要がある。

茨城県道路交通法施行細則では、信号無視や酒酔い運転、ブレーキのない自転車の運転など、道路交通法で「危険運転」と定められているもののほか、▽傘差し運転▽スマートフォンなどを操作しながらの運転▽イヤホンなどで音楽を聴きながらの運転……なども罰則の対象となっている。

学生生活課によると、今年の4～9月の間に筑波大生が関わった交通事故は34件。事故に関わった学生は39人で、うち19人が自転車走行中だった。つくば中央署の武田光平交通課長は「茨城県ではイヤホンなどで音楽を聞きながらの運転は交通違反と定められている。違反だということを自覚して、安全運転を心がけてほしい」と注意を呼びかけている。

◆全国の自転車関連交通事故状況

今年3月に警察庁が発表した「平成26年中の交通事故の発生状況」によると、昨年の全国の交通事故件数は57万3842件で、うち自転車関連の事故は10万9269件と、全体の約2割を占めた。さらに、年代別に見ると、自転車乗車中の負傷者数は16―24歳が最も多く、全体の約2割を超える。また、交通事故による死者数は4113人で、うち542人が自転車関連事故によって死亡している。

筑波大 順位下落

論文引用数が原因か

世界大学ランキング

英国の教育情報誌「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE）」が10月1日、今年の「世界大学ランキング」を発表した。201位以下は正確な順位が示されずグループ順位で発表されるが、筑波大学は301～350位グループだった昨年から、401～500位グループに下落。政府は昨年9月、「平成35年度までに、ランキング100位以内に10大学」という目標を掲げ、筑波大も100位以内を目指す大学に選ばれていた。筑波大が順位を下げた原因と今後への影響を探った。（田中開＝教育学類2年、2面に関連記事）

THE誌の世界大学ランキングは2004年に始まり今年で12回目。教育力と研究力に関する項目、論文の引用数や留学生比率、さらには外国人教員比率などの計13項目で世界の大学を100点満点で評価する。筑波大は昨年から1点弱下げ、約34・7点。国内では名古屋大学に次ぐ7位。

大学ランキングに詳しい筑波大の職員は、順位下落の主な原因に、100点中30点を占める論文の引用数の評価が昨年の3分の2に下がったことを挙げる。THE誌は今年から引用数の算出に使用する文献データベースを変更。この変更が筑波大の順位下落に影響したと見ている。

変更と順位下落の直接の関係は明らかになっていないが、変更後のデータベースは昨年までのものに比べ人文社会科学系の論文を重視しており、筑波大はこの分野での英語論文が少ないため、順位を下げたのでは、との見方もある。

また同職員は別の要因にアジアの大学の台頭を挙げる。筑波大は引用数以外ほぼ全ての指標で点数を上げたため、全体では微減に留まった。だが中国やシンガポールなどの大学がほぼ全項目で大きく評価を上げ筑波大を追い越したため、相対的に順位が下がったという。

「国際性」向上へ施策も

政府は昨年9月、大学の国際化を進めるため「スーパーグローバル大学（SGU）創成支援」を開始。筑波大など13大学が平成35年度までにランキング100位以内を目指す「SGUトップ型」に選ばれた。

それを受け筑波大は、海外の大学と提携して授業や教員を相互に交換し合い、教育や研究の質の向上を目指す「キャンパス－インーキャンパス構想」などの計画を進めている。すでに筑波大は仏ボルドー大学と国立台湾大学と提携しており、THE誌を始め世界の大学評価を行う多くのランキングで重要視される留学生数などの「国際性」の数値が向上していくと見込まれている。

今回の順位下落は出鼻をくじかれた形だが、大学内ではキャンパス－イン－キャンパス構想などの計画は始まったばかりで、今回の発表で筑波大の方針は変わらないとの見方が強い。

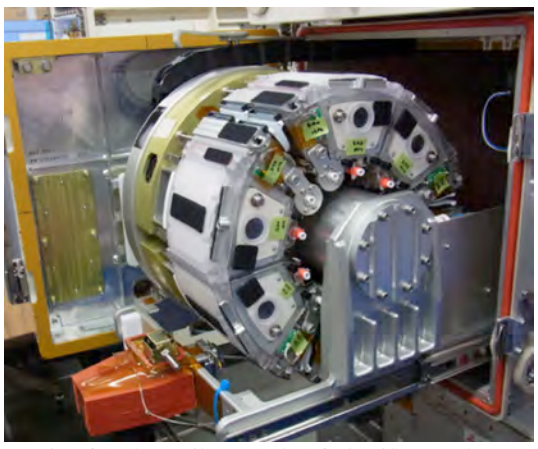
筑波大以外の「SGUトップ型」は以下の通り。東京大学、京都大学、東北大学、東京工業大学、大阪大学、名古屋大学、北海道大学、九州大学、東京医科歯科大学、広島大学、慶應義塾大学、早稲田大学。

宇宙で世界初の実験

子孫への影響調べる

高橋智教授

高橋智教授（医学医療系）のマウスを用いた実験が、来年から国際宇宙ステーション（ISS）で行われることが分かった。宇宙空間で作られたマウスの精子を基に子孫を作る世界初の実験が含まれており、同教授は「マウスは人間と同じほ乳類のため、実験結果は、宇宙空間が人間に与える影響の解明につながる」と話している。



マウスを飼育する装置。飼育箱を遠心機に取り付け、回転させて人工的に重力をかける＝JAXA提供

実験では、重力が地上の1万分の1以下になるISS内の「微小重力」環境で、マウスのオス12匹を飼育。マウスは1匹ずつ飼育箱に入れ、うち6匹は遠心機に取り付けた飼育箱を回転させ、一定の重力を発生させて育てる。また残りの6匹はそのまま微小重力下で育てる。

30日後にマウスを地上に戻し、筋肉や骨の遺伝子の変化の有無を調べる。また宇宙空間で受けた影響が遺伝するかを調べるため、マウスから精子を取って子を作る。

宇宙空間では筋肉の萎縮や骨量の減少が地上よりも速く進むことが知られているが、これらの原因が遺伝子の変化に関係があるのか、またこれらが遺伝するかなどは詳しく分かっていない。高橋教授は「宇宙空間で起こった遺伝子の異常が次世代に伝わることが分かれば大きな発見になる」という。

高橋教授は「ロケットに積むものは大きさや素材が細かく制限されるので、飼育装置の開発に苦労した。実験結果によっては、老化に伴う筋肉の委縮などを遅らせる薬の開発にも応用できるのではないか」と語っている。

（添島香苗＝生物学類3年）

筑波おろし

この夏、父の故郷の北海道に9年ぶりに行った。広大な大地と空に懐かしさを覚えたが、一つ大きな変化を目の当たりにした。富良野や札幌などの観光地で飛び交う会話の多くは英語や中国語、韓国語だった▼日本政府観光局は10月21日、1年間の訪日外国人旅行者数が、過去最多だった昨年の1341万人を9月末までに上回ったと発表した。急増する訪日客に対応するため、京浜急行電鉄は4月に品川駅で日・英・中・韓の4カ国語を話せるスタッフを配置。観光地などでも外国語に対応したガイドを揃え、「おもてなし」の対応にいとまがない▼1927年に大西洋単独無着陸飛行に初めて成功したチャールズ・リンドバーグの妻・アンは、来日した際に耳にした「さようなら」という言葉の美しさに感嘆し、自著に次のように綴っている。「（さようならは）もともと『そうならねばならぬのなら』という意味だとそのとき私は教えられた。なんという美しいあきらめの表現だろう」▼英語圏で育ったアンは、別れをあるがままに受け入れる日本人の姿が新鮮に映ったという。もし「さようなら」が、ただ「Good bye」だと訳されたなら、アンはここまで感動しなかったのではないか▼「さようなら」は、出会いを一生に一度と心得る「一期一会」の精神にも通じる。翻訳では伝えられない、言葉に根付いた日本の文化を伝えたい。

紙面から

ハイレベルフォーラム 天野浩氏ら講演 2
欧州見聞録 美術館での撮影に違和感 5
女子バレー 秋季リーグ優勝 8
剣道 2年ぶりの学生団体日本一 9
宿舎を問う 学生のマナー悪質 10
食と酒 東北祭り 地元の料理と酒味わう 11
ミニ特集 3
自転車交通違反 多発 問われるモラル
特集 6,7
産学連携が鍵 筑波大からノーベル賞を

ハイレベルフォーラム
ノーベル賞受賞者も講演

山海・天野両教授登壇

世界各地の科学技術都市の研究機関、大学、企業などの要人が集まる国際会議「ハイレベルフォーラムinつくば」の基調講演が10月26―27日に筑波大学の大学会館で開催された。27日には、昨年ノーベル物理学賞を受賞した天野浩・名古屋大学教授と筑波大の山海嘉之教授（シス情系）が講演した。

天野教授は青色発光ダイオード（青色LED）の研究でノーベル物理学賞を受賞。講演では自らの研究の意義について話した。天野教授は「（2011年の）福島第一原子力発電所の事故後、火力発電量が増加し自然環境への影響が懸念されている」と発言。自身が研究しているLEDは白熱電球よりもエネルギー効率が高く、省エネにつながるため、こうした問題の解決に役立つという。また天野教授は「研究技術を次世代に伝えるために、最先端の研究は若い研究者と協力して行うべきだ」と語った。

続いて、医療福祉・介護現場などでの活用が期待されるロボットスーツ「HAL（ハル）」＝🔑＝を開発した山海教授が講演。「ロボット技術を医療だけでなく少子高齢化による人手不足などを解消するためにも活用していきたい」と語った。重労働や人手不足が問題となっている介護現場で働く人が安全に長時間働けるよう、腰に装着するタイプのロボットスーツを開発したのも、その試みの一つだという。山海教授は「つくば市を中心にさまざまな分野の企業や研究者を集結させた科学都市『サイバニックシティ』の構想を更に発展させていきたい」と語り講演を終えた。

講演に訪れた女性は「研究が実際にさまざまな分野に活用されていると分かり面白かった」と話した。

🔑HAL＝筑波大発のベンチャー企業・サイバーダイン（つくば市学園南）の最高経営責任者（CEO）を務める山海教授が開発したロボットスーツ。人が体を動かそうとする時に脳から筋肉に送られる信号をセンサーで読み取り、装着者の意思に従って動く世界初の技術が使われている。

（佐々木悠里＝人文学類1年、写真も。12面に関連写真）

ロボットスーツ「HAL」を開発した山海教授の講演（10月27日、大学会館で）

日本の大学 軒並み下落
ランキング偏重に疑問も

【1面続き】英国の教育情報誌「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE）」が公表した「世界大学ランキング」で昨年から大きく順位を下げたのは、筑波大学だけではない。東京大学（23位→43位）、京都大学（59位→88位）、東北大学（165位→201～250位グループ）、東京工業大学（141位→201～250位グループ）、大阪大学（157位→251～300位グループ）など、日本の大学は軒並み順位を下げた。原因は筑波大の場合と同じく人文社会科学の分野での英語論文の少なさとされる。

国内の多くの大学で問題が指摘されている中、筑波大は昨年6月に人文社会国際比較研究機構（ICR）を設立。筑波大人社系の若手研究者が海外の大学や研究機関に留学するための支援を行うほか、これまで日本語で書かれていた論文を英語に翻訳して発表することを推奨し、英語論文を増やそうとしている。

筑波大の永田恭介学長も今年9月、本紙に「日本語や日本文化を扱う分野でも、教員は研究の成果を全世界に発信する意欲を持ってほしい」と話しており、今後の人文社会科学系での英語論文の増加を期待している。

一方、人文社会科学系の研究成果を英語で発表することに疑問の声も挙がっている。

筑波大のある教員（人社系）は「人文社会科学系の研究論文は、英語に訳せない概念や表現も多い。無理に訳せば論文の質が落ちる可能性がある」と指摘した。

また各大学を取材すると、世界大学ランキングを目標に定めて施策を実施することについて「目標が曖昧な上、国際性などのランキングの指標は留学生が多い英語圏が圧倒的に有利だ」などの指摘もある。

2月に筑波大が主催した「大学の国際化」がテーマのシンポジウムでは、国際大学協会のエヴァ・エグロン・ポラック事務局長が「順位を過剰に意識することで、評価の指標のみにこだわる均質的な大学が増えるのではないか」と発言。ランキングを重視する日本の傾向に「（世界の）大学に必要なのは（均質化ではなく）多様化だ」と警鐘を鳴らしていた。

（田中開）

大学版ふるさと納税
3万円寄付でワイン贈呈

筑波大学は、大学へ寄付した人に対し特典を贈呈する制度「筑波フューチャーシッププレミアム」を9月から開始した。学生への経済支援や課外活動サークルなどへの資金援助などに用いる「筑波大学基金」に3万円以上の寄付をすると特典が贈られる。筑波大は「ふるさと納税＝🔑＝の大学版」として基金への関心を広めたい考えだ。大学がこのような制度を導入するのは初めて。

特典には仏ボルドー大学との連携協定を記念して造られたワインなどが贈られる。ワインはボルドー大の提携研究機関「フランス国立農業研究所」で製造したもので、ラベルのデザインには筑波大の原忠信准教授（芸術系）が携わった。

寄付すると所得や住民税が控除される利点もある。

連携・渉外室の山田哲也室長は「学内だけでなく卒業生や近隣企業からも寄付金を募り、寄付金額の倍増を目指したい」と話す。

🔑ふるさと納税＝応援したい自治体に寄付をすると、自分の住む市区町村に払う住民税が軽減される制度。地域の特産品をその返礼として設定し、税収を増加させた自治体も多い。（徳永翼＝日本語・日本文化学類1年）

筑波大学基金に3万円以上寄付をするともらえるボルドーワイン＝連携・渉外室提供

蒸発少ない水路を実証
コストの低さが特徴

杉田倫明教授（生環系）らは、エジプトの農地で蒸発量が少なく低コストな灌漑（かんがい）＝🔑＝方法を調査で明らかにした。農地の畝の間に狭い溝を作り、そこに水を流す方法で、地面からの水の蒸発量を抑えられるうえ、水を流すパイプを使わないのでコストも低いという。調査結果は、生命環境系の研究者を中心としたプロジェクトの成果のひとつとして、エジプトの政府機関に報告されている。

川から農地に水を引く灌漑の方法として現地では▽畝の間に広い溝を掘り、土に水を浸透させる▽狭い溝を掘り、水を浸透させる▽水源から伸ばしたパイプにところどころ穴を開けて散水する……などが試みられてきた。だが、実際の農地でどれが最も効率的に水の蒸発を抑えられるかわからなかった。

そこで同教授は現地で2010年から5年間、それぞれの灌漑方法について、水の蒸発量を把握するため、水蒸気の動きを赤外線や超音波を使い測定した。

その結果、畝の間の狭い溝に水を流す方法は水の蒸発量が少ないことがわかった。同教授によると、灌漑で水が供給されるのが、作物の根近くに限られるためだという。この方法はコストも低いうえ、高度な技術も不要なため現地に普及しやすいことがわかった。

今後について杉田教授は「ナイル川の三角州の地下には上流にある巨大な『アスワンハイダム』から流れてきた地下水があると考えられる。この地下水の量が農業に利用可能かどうか調べていきたい」と話している。（深作歩美＝生物資源学類2年）

🔑灌漑＝農作物の生育に必要な水を、水路を引くなどして人為的に供給すること。エジプトの灌漑用の水源は主にナイル川の水に頼っている。

エジプトの研究者と現地で蒸発量測定値のデータ回収を行う杉田教授（右）

中年期の余暇活動
心の健康保つ

武田文教授（体育系）らは、中年期の心の健康を保つには、趣味を持つか人と一緒に運動することが有効だと明らかにした。同教授は「人との交流や社会的なつながりが健康の保持に重要」と話している。

武田教授は、厚生労働省が毎年全国規模で行っている「中高年者縦断調査」に着目。2005年の時点で心身共に健康な50～59歳の男女16642人のデータを用い、「趣味」「運動」「地域行事」「子育て支援・教育・文化」「高齢者支援」などの余暇・社会活動の有無と5年後の心の健康指標の変化との関係を統計学的に分析した。

その結果、趣味・教養や運動などの余暇活動をしている人は、そうでない人に比べ5年後にうつ状態になる危険性が低いことが分かった。一方、地域行事や高齢者支援などの社会的な活動の有無では、男女共に5年後の心の健康との関係は見られなかった。

特に運動は、一人ではなく人と一緒に行うことが、心の健康の維持に有効だった。

武田教授は、「中年期の行動が、その後の高齢期の心の健康につながる。現在働いている中年期の人が、仲間と一緒に手軽に運動やスポーツを実施できる環境の整備が重要」とも語っている。（大西美雨＝社会学類2年）

日本語コース開講式
留学生11人出席

平成27年度10月期に入学した国費外国人留学生が対象の日本語予備教育コースが開講した。10月2日にグローバルコミュニケーション教育センターで開講式が行われ、ホンジュラス、メキシコ、インドネシアなど8カ国から来日した留学生11人が出席した。

同コースでは、日本の大学院への進学を目指す留学生や、日本や海外での教員を志望する教員研修生が、専門の授業を受ける前に集中的に日本語を学ぶ。日本文化の授業も行われ、楽しみながら日本について学ぶ機会が設けられている。

開講式では小野雄一助教（人社系）が留学生に向けてスピーチを行い、「日本人は内気な人が多いので、自分から積極的に行動してほしい」と激励した。同コースを担当する関崎博紀助教（人社系）は「日本についてよく理解し、海外の人々に日本を伝えるための語学力を身に付けてほしい」と語った。（橋野朝奈＝日本語・日本文化学類1年）

山田信博前学長 死去
大学のブランディングを推進

山田信博・前筑波大学学長が病気のため10月13日に亡くなった。63歳だった。

糖尿病の研究で功績を上げ、東京大学助手、同大講師、同大助教授、筑波大教授、同大附属病院長を経て、2009年に筑波大学第8代学長に就任。「IMAGINE THE FUTURE」をスローガンに筑波大のブランディングを推進した。12年8月に脳梗塞のため入院し、闘病を続けていたが、翌年3月の任期満了に伴い退任した。

大学葬や偲ぶ会の開催は未定。

中村名誉教授死去

中村以正・筑波大学名誉教授が心不全のため10月11日に亡くなった。85歳だった。

専門は応用生物化学。東京教育大学農学部助手、同助教授などを経て、1978年4月から筑波大教授。85年4月から89年3月まで筑波大応用生物化学系長。

94年に同大を退職後、相模女子大学教授や同大学園長などを務めた。

自転車交通違反 多発

並走 無灯火 問われるモラル

【1面続き】多くの筑波大学生が使用する自転車。つくば中央署によると、6月に道路交通法が一部改正され、自転車の交通違反の罰則が強化された。このため指導を受ける学生が増加したという。実際に自転車で交通違反をしている筑波大生はどれだけいるのか、筑波大生が多く通行する2地点で継続的に計測し、同署などに取材し、筑波大生の自転車運転の現状を探った。（油布知夏＝人文学類、加藤未悠、新田萌夏＝社会学類、中垣音彩＝心理学類、栗山菜帆子＝障害科学類）

走行中のイヤホン使用多数

■天久保3丁目のローソン前の交差点付近

10月13―16日の午前8～9時の間に通行した自転車の数は計1517台で、そのうち交通ルールを違反していたのは331人。特に、信号無視が100人、イヤホンなどをしながら運転する人が123人と多かった。雨が降った16日には傘差し運転が目立った。

信号無視をする自転車の運転者たち（10月17日、天久保3丁目のローソン前の交差点で）＝新田萌夏撮影

◆調査方法

10月13―16日の4日間、①午前8～9時、②午前11時半～午後0時半、③午後5時半～6時半の任意の時間帯に、天久保3丁目16の8のローソン前の交差点と、同丁目4の1のミニストップ前の交差点の2カ所で、自転車の総通行数と、交通違反をしている自転車数を集計した。交通違反の基準は、道路交通法の中で「危険運転」に指定された14項目を参考に作成したもので、以下の通り。▽信号無視▽路側帯や歩道のない道路の右側を走行▽無灯火運転▽傘差し運転▽イヤホンなどを着けて運転▽スマートフォンなどを操作しながら運転▽並走運転▽2人乗り運転▽その他の危険な運転

14―16日の午前11時半～午後0時半の間に通行した自転車は400台。無灯火運転が42人で、約10人に1人が無灯火運転をしていた。

■天久保3丁目のミニストップ前の交差点付近

13日と16日の午前8～9時の間に通行した自転車は750台で、多かったのはイヤホンを着けたままの運転で72人だった。16日は小雨の影響で40人が傘差し運転をしていた。

13日、15―16日の午前11時半～午後0時半の間は、通行した885台のうちイヤホンなどをしながら運転する人が112人と多かった。

13日の午後5時半～6時半の間に通行した自転車は399台で、無灯火運転が26台だった。

更に、13―16日の間、その他の危険な運転として、▽片手に荷物を持ちながら運転▽両手を離して運転▽肘でハンドルを操作▽道路の中央を走行……などが見られた。

ルポ

観測の結果、午後5時半～6時半に通行した自転車のうち約1割が無灯火で運転していた――。なぜ無灯火運転をしてしまうのか。実際に暗い学内を歩き現状を調べた。（油布知夏）

無灯火運転 「ライト壊れて」

10月9日の午後7時45分から午後8時45分までの1時間、第一エリアからペデストリアンデッキを通り、平砂・追越宿舎敷地内を歩いた。通過した自転車は142台、うち無灯火で運転していたのは20台だった。

6限が終了し2時間弱が経っていたが、学内を走る自転車は少なくない。日中に比べると人の数が少ないからか、かなりスピードを上げて走る自転車が目立つ。

体育・芸術エリアと平砂宿舎の間の細道で、急に黒い影が近付いてきた。目を凝らすと無灯火の自転車だと分かる。声をかけると学生はすぐに自転車を止めた。無灯火の理由は「ライトが壊れていてつけられないから」だという。「早めに修理します」と申し訳なさそうにしていたが、自転車から降りて歩くことはなく、無灯火の自転車に再び乗り去っていった。

その後も次々に無灯火運転者に遭遇した。そのうち10人に話を聞いたが、半数が「ライトが壊れている」と答えた。「電池式のライトを取り付けていたが、今日電池が切れた」「約2週間前から壊れているが、忙しいのでそのままにしている」など、無灯火で運転している理由はさまざまだった。「ライトが元から無いため、そのまま乗っている」という人もいた。

単にライトをつけ忘れている人も多かった。たまたま忘れていて指摘されればすぐにつける人もいれば、記者が注意しようと近づいた途端に慌ててライトをつける人もおり、「ライトなしでも運転できる」という油断がうかがえた。

取材を終えて

今回夜道を歩いて感じたのは、ライトの重要性を意識していない学生が多かったことだ。例えば、ライトをつけていても無灯火に見えるほどライトの光が弱い自転車がひどく目についたが、茨城県道路交通法施行細則によると、自転車のライトは「白色または淡黄色で、夜間、前方10㍍の距離にある交通上の障害物を確認することができる光度を有する前照灯」と規定されている。ライトをつけさえすれば良いと思うのではなく、何のためにライトが必要なのか、いま一度考え直してほしい。

学生の声

自転車の交通ルールについて、学生はどのように考えているのか。中央図書館や第二エリア食堂周辺で聞いた。

【応理1年・男性】

道を確認するためにスマホを使用しながら運転したり、ライトの電池を換えるのを忘れていて切れたまま無灯火運転したりすることがある。違反行為をしていることに罪悪感を感じている。

【メ創4年・男性】

違反行為とは知っているが、傘差し運転やイヤホンを着けて運転する。傘差し運転はカッパだと脱ぎ着するのが面倒で、置き場所にも困る。イヤホンは移動中の暇つぶしに使用してしまう。

【社学2年・男性】

前から走ってきた無灯火の自転車に衝突しそうになったことがある。自分はライトを点けていたが、相手を確認できなかった。急ハンドルを切って衝突は回避したが、とても怖かった。

【スクール1年・女性】

歩いているとき、脇見運転をしていたのか、自転車がわき腹に接触してあざができた。周りの人が怖い思いをするので、交通ルールをしっかり守ってほしい。

【国総4年・女性】

大学会館前の坂道で、車いすが通行するすぐ横を自転車がスピードを落とさずに通り抜けようとし、車いすに衝突しそうになっていた。近くに歩行者などが通る場所を通行する時は、自転車のスピードを落とすべきだ。

【社学1年・女性】

片手でスマートフォンを操作しながら自転車を運転し、切り株に引っかかり自転車ごと転倒し、足にけがをした。けがをしてからは危険な運転はしないように注意し、周りにも気をつけるよう言っている。

「自転車は軽車両」 自覚を

武田光平交通課長

――つくば中央署管内の交通事故件数とその内訳は。

筑波大周辺で発生した事故件数や、事故が起きやすい場所や注意すべき点について、大学周辺のパトロールを行うつくば中央署の武田光平交通課長に話を聞いた。（聞き手・新田萌夏）

同署管内の交通事故は、今年1月から10月5日までに596件発生した。うち109件は自転車が関わるもので、死亡事故も2件あった。

多いのは自転車と自動車の事故。特に自動車が左折する時に自転車を巻き込み、接触した事故が目立つ。自転車側は「（自動車が）自分に気付いているから停まるだろう」と思いがちだが、実際は植え込みなどで死角があり、自動車が自転車に気付かない場合がある。左右の確認を怠らないでほしい。

筑波大周辺では、柴崎交差点や学園西大通りなど天通りでの事故が多発している。朝の通勤・通学時間帯は交通量が特に多いため、青信号でも左折する自動車がいないか注意して横断する必要がある。

――パトロール中に気になることは。

自転車の無灯火運転や傘差し運転、イヤホンなどで音楽を聞きながらの運転が多い。音楽を聞きながら運転するのは茨城県道路交通法施行細則で禁止されている。その他にも、他県では違反でなくても茨城県では違反行為となる場合があるので注意してほしい。

――6月に改正された道路交通法はどのような内容か。

危険な運転をする自転車の運転者に対しては、これまでも検挙や警告を行ってきた。だが改正された道交法では、交通事故を含む危険行為を3年間で2回以上繰り返した自転車の運転者は、「自転車運転者講習」を受けることが義務化されるなど自転車への罰則が強化されている。茨城県内で講習を受けた人はまだいないが、他県ではすでに講習を受けた例がある。

――自転車の運転者に対して一言。

自転車が関わる交通事故では、自転車側に過失がある場合もある。自動車と異なり運転免許が不要な自転車を、軽い気持ちで運転する人が多いのではないか。自転車はれっきとした軽車両。免許は不要でも、「車両を運転している」という意識を持つことが事故減少への第一歩だ。

マナー向上へ 講習会実施

学生生活支援室などが主催する「自転車交通安全講習会」が10月9日に1H棟で開催され、つくば中央署の交通課長やつくば市交通安全指導員らが、交通マナーや学内の自転車問題について講演などを行った。

はじめに、学生生活課の職員が学内の危険箇所や、学生が関わる交通事故件数を紹介。同課の調べによると平成26年度は自転車の単独事故が24件、自転車同士の事故が10件、自転車と自動車の事故が20件、自転車と自動二輪車の事故が2件、自転車と歩行者の事故が2件発生していた。「事故原因は脇見運転や注意不足などが多い。スマホを見たり、イヤホンを着けたまま運転しないでほしい」と語った。

シミュレーターを体験する学生（10月9日、1H棟で）＝中垣音彩撮影

その後、つくば市危機管理課の交通安全教育指導員が「自転車運転シミュレーター」を使用し交通安全指導を実施。これは、画面上に出てくる危険に注意しながら目的地まで走行体験し、安全に運転ができていたかを確認できる機器で、学生4人が体験した。信号の前での一時停止や、歩行者のそばを通る場合の運転の仕方など、注意すべきポイントを指導員が解説。シミュレーターを体験した学生は「安全確認するために止まるべき場所が多いことに驚いた」と話した。

講演会に参加した学生は「普段の後方確認などが甘かったと気付いた。小さな危険が多いことが分かったので、注意して運転したい」と語った。

学生生活課では今後、大学付近の各所で走行・横断する自転車やバイクなどに指導を行う予定。

記者の声

鈴木拓也

ICタグ導入から2年 メール警告開始に期待

筑波大学がICタグを用いた自転車・バイク登録制度を始めて10月で丸2年がたった。大学としては全国初の制度で、迷惑駐輪や放置自転車をなくすことが大きな目的だったが、当初予定されていた迷惑駐輪の学生へのメール警告は10月29日現在、まだ行われていないままだ。私は導入の約1年前からこの制度を取材してきたが、ICタグは使い方によっては学内の自転車問題の解決に大きく貢献すると思う。制度にはすでに2000万円近い大学予算が投入されてもいる。積極的な制度作りを進めてほしい。

◆メールでの警告

ICタグは縦約15㌢、横約1㌢の棒状で、学内で自転車を使用する学生は粘着テープで貼り付けることが義務づけられている。個別の識別番号があり、専用の機械で所有者を特定できる。当初は、点字ブロックや通路上など駐輪スペース以外にある自転車を見つけ次第、大学側が所有者に即時メールで警告し、複数回警告を受けると所属の学群長などが指導・注意する予定だった。

この警告の開始時期について学生生活課は、昨年10月の取材時では「年内に始めたい」としていた。しかしそれから1年たった今も実施されておらず、同課は「他の作業を優先したためで、今年11月ごろから始めたい」としている。

これに対して複数の学生に取材すると、「ICタグを生かせていない」「メール警告を学生のマナー向上に役立ててほしい」などの声が目立った。今学期も第二エリアや第二エリアなど、学内の至る所で駐輪スペース外に止められた自転車を見かけるのは日常茶飯事。制度の効果を実感できないことが、これらの声の背景にあると思う。

問題は他にもある。その一つがICタグの値上げだ。ICタグは制度開始前までは学生に無料配布されていた。だが、昨年度は、学生は学内で自転車を使う場合、ICタグ代として一人当たり1000円を払っている。来年度からは倍額の2000円になる。

だが、今年8月に行われた値上げに関する説明会に学生はほとんどいなかった。これもメール警告の遅れなどが原因で、学生が制度の効果を実感できないためかもしれない。メール警告を11月ごろから始めるのなら、学生を納得させるためにもその成果を伝えていくことが重要だ。

同制度には、これまでに多くの大学の予算が使われている。初年度は約1400万円で、昨年度が約300万円。今後は予算はつかず、年約600万円の運営費を学生から集めるICタグ代で賄う予定だ。これを無駄にしてはいけない。

◆成果の発信を

もちろんICタグは成果も出している。昨年の取材では、自転車に貼ってあるICタグが奏功し、学内で盗難自転車が持ち主の手に戻った例が約20件あったことが分かった。

昨年7月には担当者が学内でICタグ付きの放置自転車を発見。タグの情報から持ち主を特定して連絡したところ、盗難自転車だと分かり、持ち主に返還されたケースもある。

こうした成果を学生に伝えることは、自転車問題への関心を高める一助になるに違いない。

制度の維持費は安くなく、学生が効果を実感できなければ、不満はたまるばかりだ。まずはメール警告など、実効力のある取り組みを期待したい。（人文学類4年）

筑波時評

ツタヤ図書館 民間業者の参入に賛否 批判聞き入れ成長望む

逸村（いつむら） 裕（ひろし） 教授（図書館情報学）

図情メ系・教授。慶應義塾大学大学院修了、修士（文学）。名古屋大学助教授などを経て、2006年から現職。主著に「変わりゆく図書館」（勁草書房、共編著）などがある。

話題の神奈川県海老名市立図書館に行ってきた。2番目の「ツタヤ図書館」である。ツタヤ図書館は、レンタル大手TSUTAYAを運営するカルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）が参画する図書館のことだ。

2013年、佐賀県武雄市図書館が樋渡啓祐市長（当時）のもと、最初のツタヤ図書館として開館し話題を集めた。入館者数は急増し100万人となり、利用者満足度85%というデータも示された。一方、系列書店の古実用書を多数購入したり、地域資料を廃棄したり、図書館流通センター（TRC）と組んで運営に取り組む。運営は批判され、違法な業務委託契約とする住民訴訟も起きている。

海老名市立図書館は、武雄市の先例を踏まえ、図書館委託業務を多数経験している「図書館流通センター（TRC）」と組んで運営に取り組む。30年前の外装のまま内部を大きく変え、1階にスターバックスが入り、蔦谷書店が雑誌や文房具を売る。分類は書店方式のCCCの独自分類で排架している。公共図書館のイメージを変え、年間100万人の入館者を目指すという。高橋聡図書館長はセレモニーで「2年前、武雄市では私たちは素人でした。今は違います」と宣言した。

日本には図書館法で規定された公共図書館が3265館ある。近年、この公共図書館界に民間業者の参入が相次ぎ、現在では約400の公共図書館が指定管理または委託となっている。愛知県小牧市の住民投票では、CCCと連携した新図書館建設計画への賛否の住民投票が行われ、反対56%の投票結果を受け小牧市長は計画の見直しを表明している。

館内を歩いた。海老名市立図書館は地下1階に「大人の隠れ家」と称した静謐（せいひつ）な書庫と座席、1階から吹き抜けの2階は明るい書架と閲覧席、3階は書架と静かな閲覧環境、4階はプラネタリウムを改築した「キッズライブラリー」。外光を取り入れ、動線は曲線が多く、書架は高く、図書を素材に独創的な空間作りを意識している。全体の雰囲気は代官山の蔦谷書店に似ている。一方、その蔵書構成や選書基準、分かりにくい図書の排架は問題視されている。市議会、テレビ番組、ネット上でも多くの議論が起きている。

今後、海老名市立図書館は批判に応えつつ、新しいサービスの展開と発展に力を尽くすだろう。限られた予算の中で人を呼び、利用者の役に立つ図書館とは何か、問われている。

かつてインドの図書館学者ランガナータンは、提唱した「図書館学の五法則」で「図書館は成長する有機体である」と論じた。海老名市立図書館の今後に注目したい。

反射鏡

茨城県に魅力感じる？

ブランド総合研究所（東京都港区）が9月30日に発表した都道府県別の魅力度で、茨城県は3年連続の最下位だった。茨城県には袋田の滝（大子町）や鹿島神宮（鹿嶋市）など古くから有名な観光地があるが、筑波大学生は茨城県の魅力についてどう考えているのか。中央図書館前や第二エリアなどで聞いた。（佐々木悠里＝人文学類1年、前名裕一＝社会学類1年）

■茨城県出身者

【国総4年・男性】

茨城の魅力は、田舎ならではの人の温かさや自然の豊かさだ。だが交通マナーが悪いため他県の人は住みにくいのではないか。

【数学1年・女性】

目立った魅力はないと思う。挙げるとすれば偕楽園（水戸市）か国営ひたち海浜公園（ひたちなか市）、牛久大仏（牛久市）などの観光地ぐらい。また交通事故が多いので他県民の悪いイメージは強いのではないか。だが田舎過ぎず、都会過ぎないのが茨城県の良い点だ。

【日日1年・男性】

最下位になるほど魅力がないとは思わない。緑が豊かでニラやメロンなど食べ物がおいしい。つくばエクスプレスがあるので都心へのアクセスも悪くない。

【社工4年・男性】

メロンなど、生産量1位の農産物が多い。袋田の滝など自然も豊か。アクアワールド茨城県大洗水族館（大洗町）や国営ひたち海浜公園、筑波山（つくば市筑波）などの観光地もある。ただ、他の地方とは違い茨城県にローカルテレビ局がないのが不満。

【芸専4年・女性】

魅力的なところはすぐには思い浮かばない。殺風景なイメージで、あまりPRにも熱心でないと思う。

■茨城県外出身者

【構工ネ1年・男性】

茨城にはこれといった魅力がないと思う。特に遊園地などの娯楽施設がないのは寂しい。

【情科4年・男性】

土浦市の花火大会や牛久大仏など全国的に有名なものはあるがPRが足りないと思う。悪い点は特にない。

【CS3年・男性・中国】

海が近く公園の数が多いため、自然を楽しめるのが良い。ただ県内の交通の便が悪いと思う。自分もビザを取得するために水戸市まで行くのに苦労した。

【生資4年・男性】

魅力度が3年連続最下位なのはかえってすごいと思う。茨城県は首都圏にあるので田舎過ぎないのが良い。大洗町やつくば市には仕事や観光で訪れる人も多いのではないか。

【生資4年・男性】

メロンや梨などおいしいものが多い。水戸藩や筑波山神社といった少しマニアックな歴史も楽しめる。県の魅力をうまくPR出来ていないのが魅力度最下位の原因だと思う。

【社学3年・女性】

茨城県には、出身地の埼玉県より魅力がたくさんあり うらやましい。海があるだけでも良いと思う。

大学循環バス10周年

大学の北地区と春日地区を結んでいた学内バスに代わり、関東鉄道が運営するつくばセンター発着の「筑波大学循環」バスが運転を開始してから今年で10周年を迎えた。循環バスは現在も筑波大学生の主な交通手段の一つだが、筑波大生は循環バスについてどう考えているのか。中央図書館前と石の広場で聞いた。（岡田優太、小宮山瑛生＝社会学類1年）

【看護1年・女性】

通学時に利用している。雨の日は普段よりかなり利用者が多く、車内がすごく窮屈に感じる。

【知識図書1年・女性】

循環バスを利用したことがない。大学のすぐ近くに住んでいるので、通学には自転車だけで十分だから。

【心理2年・男性】

駅に行く時たまに利用している。普段は自転車を使うが、買い物などで大きな荷物を持っている時に利用しており、重宝している。

【国総1年・男性】

1年間有効のバス定期券を購入したが、あまり利用していない。自宅から通学しているので、悪天候ならバスに乗るが普段は自転車で十分。1限の授業開始に間に合う時間帯のバスが増えればうれしい。

【人文4年・男性】

2年次まで定期を購入していた。だが3年次に定期代金が2倍になってから、定期も買わず循環バスもあまり利用しなくなった。つくばセンター周辺に行くことが多く、元の値段に戻してほしい。

また、休日の運行本数がもう少し多ければ便利だと思う。

【社学1年・男性】

時々利用する。普段は自転車を利用しているが、もう少し本数が多ければ乗る機会も増えると思う。

【国総4年・男性】

通学時に利用しているが、運転が荒いと感じることが時々ある。バス停で待っていたのにバスに通過されたことが一度ある。

【物理専攻1年・男性】

通学時に利用している。研究などで夜遅くまで大学に残っていた時、バスの本数が少なく不便だったので増便してほしい。また、スピードが速いのでカーブなどに差し掛かった時は支えがないとつらい。

【社学1年・女性】

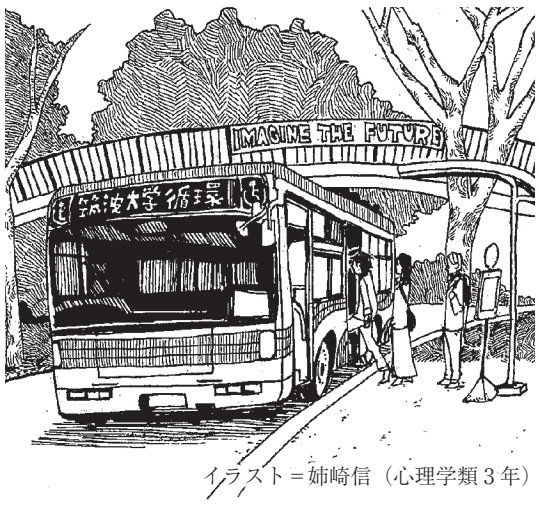
週に一度、大学から離れた場所へ買い物に行く時利用する。バスは時間通りに来るし、運転手の対応も良い。筑波大学中央行きのバスの路線が一の矢学生宿舎まで伸びればうれしい。

【看護1年・女性】

通学時に利用している。運転手によって運転の仕方に差があり、立っているとカーブや曲がり角に差し掛かった時つらいことがある。夜間は右回りの循環バスが少なく不便に感じる。

【CS2年・男性】

6年間、定期を買い続けている。特に3年前に自転車を盗まれて以来はヘビーユーザーとなった。今は一の矢に住んでいる。運行本数は多くないが、バスの時刻を基準に予定を立てるようにしているので特に困っていない。



イラスト＝姉崎信（心理学類3年）

芸術活動の成果まとめる

芸術支援展ケア × アートⅢ

■オブジェ展示も

芸術専門学群と筑波大学附属病院、筑波メディカルセンター病院（つくば市天久保）が行ってきた芸術活動の成果をまとめた展示会「芸術支援展ケア×アートⅢ いきいきホスピタルレポート」が、10月20日から筑波大学芸術系ギャラリーで開催されている。

飯田さんが作成した動物のオブジェ（10月23日、筑波大芸術系ギャラリーで）

同学群と2病院は、2013年から文化庁の事業の一環で病院でのアートプロジェクトを実施。会場では、病院内で過去に展示した学生の作品や、附属病院前の芝生に花壇を設置し安らげる場を生み出した事業などを紹介している。

注目を集めたのは飯田瑠璃子さん（芸専2年）が制作したオブジェ「Animal×Life きりんのフレディ、うさぎのマーシー、ねこのトム」。ワイヤーと紙で成形した動物をカラフルに着色し、楽しさや温もりを表現した。猫のオブジェは、7月に附属病院で実施したワークショップで入院中の子どもと一緒に学生や職員が絵の具で色を塗った。附属病院のけやき棟に9日間展示され、かわいらしい動物たちが多くの人をなごませた。

展示会の運営に携わった小中大地研究員（芸術系）は「芸術には患者やその家族を元気にする力があると思う。今後も活動を続けていきたい」と話した。

展示は11月27日まで。（大西美雨、写真も）

合唱団むくどり 多彩な歌声で魅了

合唱団むくどりの第35回定期コンサートが、10月16日につくばカピオ（つくば市竹園）で開催された。2部構成で、合唱曲やJポップなど16曲を披露した。100人以上の観客が、美しい歌声に耳を傾けた。

コンサートは、合唱曲「いっしょに」で幕を開けた。楽器の伴奏なしで歌うアカペラで、柔らかい歌声を響かせた。2曲目はJポップアーティスト「いきものがかり」の「GOLD EN GIRL」。団員の一人がギターで伴奏した。明るく弾むように歌い、会場を盛り上げた。

第2部の3曲目には、女性団員がアカペラでミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」の劇中歌「My Favorite Things」を披露。透明感のある歌声で、美しいハーモニーを作り上げた。

団長の遠藤祐哉さん（数学3年）は「コンサートに向けて6月から練習してきた。楽しく歌えて満足している」と話した。（廣岡里穂＝人文学類2年）

麦積山石窟研究展 仏像写真50点展示

筑波大学大学院人間総合科学研究科の世界遺産専攻が行った、中国北西部の甘粛（かんしゅく）省にある仏教寺院の一つ「麦積山石窟（ばくせきさんせっくつ）」に関する研究の成果を展示した「世界遺産専攻 麦積山石窟研究展」が、10月20日から筑波大学アートスペースで開催されている。

麦積山石窟は精巧な作りの仏像が多くあることで知られる。同専攻は現地の研究所と共同で、2005年から10年まで仏像の美術史や保存科学などを調査。報告書が中国国内で高い評価を受けたことが今回の開催につながった。

会場では教員や学生らが撮影した仏像の写真約50点と、研究成果をまとめた論文や書籍を展示している。

主催した八木春生教授（芸術系）は「展示を通して、石窟を保存することの重要性を感じてほしい」と話した。

研究展は11月29日まで行われている。（岡田優太）

◆おことわり

今回の絶対音感はお休みさせていただきます。

筑波大学出版会 近刊案内

地域的近代を生きるソロモン諸島
―紛争・開発・「自律的依存」―

近代的状況に向き合う、南太平洋のソロモン諸島の人々と、社会のリアリティを描き出す。

関根久雄 著

彼らは、資本主義を拒否するわけでも、西洋的普遍主義を殊更に嫌悪しているわけでもない。反近代でも前近代でも、脱近代でもない「ソロモン諸島的近代」の様相を導く論理を、人類学的視野から明らかにする。

西洋近代化を指向する社会の一般的潮流の中から派生してきた「抵抗」の姿を、7つのキーワードを基にまとめた。

著者は筑波大学人文社会系教授。A5判並製、約200頁。10月24日刊行。3400円＋税。

欧州見聞録

イタリア

美術館での撮影に違和感

【フィレンツェで平嶋健人＝社会学類4年、写真も】欧州を旅していて美術館や劇場を訪れ、本場の芸術に触れるのは楽しみの一つだ。だが、今年は各地で異変が起きていた。美術品や演奏者の写真を撮る観光客が激増しているのだ。

スマホや、写真を友人と手軽に共有できるフェイスブックなどのSNSが普及したいま、写真を撮る機会は急激に増え、時代の波が美術館にも押し寄せている。イタリアではこれまで、ほぼ全ての美術館で写真撮影を禁じてきたが、観光客から「館内で写真を撮りたい」などの要望が増えたことから撮影を認める法改正が行われた。

写真が解禁となったフィレンツェのウフィツィ美術館を訪れた。質と量ともに欧州指折りで、展示室に入るとダ・ヴィンチやミケランジェロらの傑作が目を引く。しかし、それ以上に気になったのは、写真を撮ろうと名画に群がる観光客の姿だ。

例えば美術の教科書でもおなじみの絵画「ヴィーナスの誕生」の写真を撮る人は5分間で42人。多くがスマホによるものだ。展示室にはカシャカシャという電子音がひっきりなしに響き渡る。腕を高く上げ、少しでも完璧な写真を撮ろうと躍起になったり、「自分撮り」をしてSNSに投稿している人もいる。同様の光景は、いまや欧州の他の美術館でも珍しくない。

熱心に写真を撮っていた青年は「こんなに美しい絵なんだから、撮らずにはいられないよ」と興奮気味に話したが、彼らの行為には違和感を覚えた。絵を近くで見ようとすると背後からカメラの気配を感じる上、絵画の前で撮影を待っている人もおり、どうも居心地が悪い。鑑賞中に視界を遮るスマホの画面も邪魔になる時がある。

名画「ヴィーナスの誕生」を撮影する来場者ら（10月24日、フィレンツェで）

ただ、美術品の写真撮影は、良い悪いで判断できない問題だ。同美術館で日本語ガイドをしているという女性は当初、絵画の前での記念撮影などに「戸惑った」というが、「（同館の）名画の写真が撮れる機会は一生に一度くらい。訪問客は記憶に残った作品を思い思いの視点で写真を撮り、持ち帰れる」と理解を示した。

【コンサート会場でも】

欧州のオペラやコンサートの舞台では、マナー違反の撮影行為も問題になっている。7月から9月にかけてロンドンで行われたクラシック音楽祭「プロムス」では、演奏中に写真を撮る観客が目についた。撮影は禁止だが、中には堂々と動画を撮る人もいた。8月には、ロンドンで人気の舞台が上演中のフラッシュ撮影によって一時中断される騒動もあり、地元紙は聴衆のマナーが悪くなっていると指摘。「（マナー違反行為が）他の観客の鑑賞の楽しみを阻害している」と報じた。ロンドンだけの問題ではない。プラハやウィーンの劇場でも同様の行為が見受けられた。

前出の舞台の主演俳優は「劇場では生のパフォーマンスに集中してほしい」と訴えたという。舞台に限らず、芸術は生で体験してこその感動がある。夢中になるべきはスマホの画面ではない、と思わずにはいられない。

◆

次号から「ジャカルタ見聞録」をお伝えします。

『星の王子さま』サン＝テグジュペリ 著
（岩波少年文庫）

青春時代から続く本との関係

初めての外国語学習は初めてのデートにも似てわくわくする。その体験をしたのは大学1年生の時、1970年のことである。それまでフランス語の学習歴は全くなく、中学生の時にS・ヴァルタンの「アイドルを探せ」という曲がはやっていて、同級生の女友だちからそのレコードを貸してもらって聴いた程度だった。

アルファベから接続法までを1年生で学び、動詞の活用を覚えるのには苦労したが、あこがれのフランス文学の世界に近づいている気がして楽しかった。マルセル・プルーストの短編『乙女の告白』の講読を、高畠正明先生というアルベール・カミュの専門家に学んだ。大学の外でもフランス語に触れるよう努めていた。女優カトリーヌ・ドヌーヴ主演の映画「シェルブールの雨傘」を見たのは、フランス語学習とセットになった「デート」であったような気もする。

『星の王子さま』のレコードを買い求めたのも学生時代である。画家モディリアーニの伝記映画「モンパルナスの灯」で主演したG・フィリップの朗読がLPレコードに収録されていた。

朗読は、この物語の語り手である飛行士が砂漠に不時着し、星の王子さまと出会うところから始まる。フランス語初心者である私は、高速の朗読をほとんど聞き取れなかったが、飛行士に投影されたサン＝テグジュペリの焦燥感、孤独感、そしてこの金髪の少年への愛おしさは、ジェラール・フィリップの声の抑揚から十分に感じ取ることができた。

話の舞台は北アフリカの砂漠である。大学を出て美術館に就職し、結婚してからモロッコへ夫婦で旅行した時、バスから見た星空は、車窓から星がつかめると思えるほど地上の人間に強い光を降り注いでいた。

その後、大学へと職場が変わり、「専門語学フランス語」を担当することになった。その授業は美術に関するフランス語文献を読むものだが、受講生が初修外国語で学んだ初級文法の復習もかねて、『星の王子さま』を少しだけ読むことにしている。S・ヴァルタンの歌も授業で流している。

学生時代から読んできたサン＝テグジュペリのこの名作とはすでに40年以上の付き合いとなった。青春時代の本との出会いは他にもあるが、これほど長く接しているのは、この本だけである。その間に再び一人暮らしとなり、サン＝テグジュペリの気持ちもいくらか理解できるようになった。星の世界に帰った家内の誕生日である今日、星の王子さまを愛した飛行士のこの言葉を引用し、拙稿の締めくくりとさせていただく。

「ぼくは夜になると、空に光っている星たちに、耳をすますのがすきです。まるで五億の鈴が、鳴りわたっているようです……」（131頁）

齊藤泰嘉（さいとうやすよし） 教授（芸術支援）

芸術系・教授。慶應義塾大学大学院文学研究科修了。東京都現代美術館を経て一九九六年より筑波大学に勤務。芸術支援学、美術論、博物館学、専門語学仏語等を担当。アフリカ中東での病院アートマネジメントについて構想中。

筑波大からノーベル賞を

筑波大卒業生 受賞者ゼロ

ノーベル賞受賞者が10月に決定し、医学生理学賞に大村智・北里大学特別栄誉教授が、物理学賞に梶田隆章・東京大学宇宙線研究所長が選ばれた。日本の受賞者は急激に数を増やしており、21世紀に入ってから計15人が受賞。だが筑波大学では2000年の白川英樹名誉教授を最後に受賞がない。どうすれば受賞者を輩出できるのか。学内の関係者や学生に取材した。（井口彩、小宮山瑛生、山野辺拓実＝社会学類、田中開＝教育学類、深作歩美＝生物資源学類）

日本で初めてノーベル賞を受賞したのは、1949年物理学賞の湯川秀樹氏。その後、医学生理学賞、物理学賞、化学賞、文学賞、平和賞の各賞で日本人はノーベル賞を受賞。今年は医学生理学賞で大村智氏、物理学賞で梶田隆章氏が選ばれ、日本人の受賞者は計24人となった。

日本の受賞者の学歴では、学部卒業時点で最も多いのは東京大学の7人。京都大学6人、名古屋大学3人と続く。また、受賞者に博士号を授与した大学院は、東京大が6人と最多で、名古屋大5人、京都大2人。だが筑波大出身の研究者はまだノーベル賞を受賞していない。

筑波大関係者では、朝永振一郎名誉教授（65年物理学賞）、江崎玲於奈名誉教授・元学長（73年物理学賞）、白川英樹名誉教授（00年化学賞）の3氏が受賞している。

だが、3氏はいずれも筑波大出身ではなく、筑波大での研究で受賞したわけではない。朝永氏は筑波大の前身の東京文理科大学で教授として研究していた。江崎氏は東京帝国大学卒業後、企業の研究員として活躍。筑波大との関わりができたのは、ノーベル賞受賞から約20年後の92年に学長に就任してからだ。

一方、白川氏は57年に東京工業大学に入学、同大学で博士号を取得した後、同大学での助手を務めていた。その後79年から00年まで筑波大で研究活動を行っていたが、ノーベル賞で評価されたのは東京工業大での研究成果だった。

日本人受賞者が学部卒業した大学

①東京大学　7人
川端康成（1968 年文学賞），江崎玲於奈（1973 年物理学賞），佐藤栄作（1974 年平和賞），大江健三郎（1994 年文学賞），小柴昌俊（2002 年物理学賞），南部陽一郎（2008 年物理学賞），根岸英一（2010 年化学賞）

②京都大学　6人
湯川秀樹（1949 年物理学賞），朝永振一郎（1965 年物理学賞），福井謙一（1981 年化学賞），利根川進（1987 年医学生理学賞），野依良治（2001 年化学賞），赤崎勇（2014 年物理学賞）

③名古屋大学　3人
小林誠（2008 年物理学賞），益川敏英（2008 年物理学賞），天野浩（2014 年物理学賞）

論文引用数 東大と大差

■論文引用数

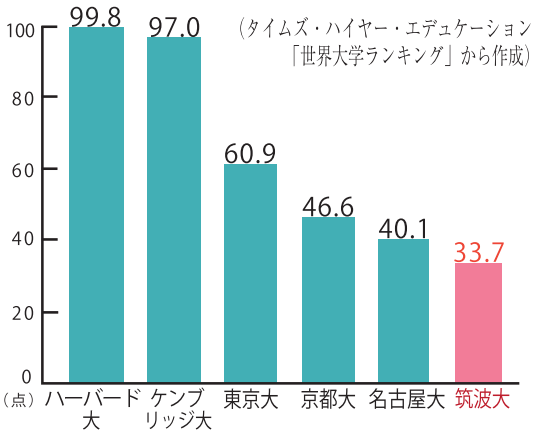
英教育専門誌タイムズ・ハイヤー・エデュケーションの平成27年度の「世界大学ランキング」は、他の人の論文で引用された数を得点化し公表している。これによると筑波大学の得点は33・7。ノーベル賞受賞者を多数輩出している東京大学は60・9、京都大学は46・6、名古屋大学は40・1で、筑波大学の得点が低いことがわかる。また、英ケンブリッジ大学は97・0、米ハーバード大学は99・8で、世界トップレベルの受賞者数を誇る大学と比べるとその差は更に大きい。

■科研費

大学などでの科学研究に対し文部科学省と日本学術振興会が交付する「科学研究費補助金（科研費）」は日本の競争的な研究資金の約5割を占める。人文学や社会科学、自然科学などすべての独創的・先駆的な分野が対象で、科研費の採択や配分は研究者が応募した研究計画を審査し決める。

文部科学省によると、日本の国公立・私立大学や研究機関全体の科研費の採択率は26・5％と低いが、2014年にノーベル物理学賞を受賞した赤崎勇・名城大学終身教授や天野浩・名古屋大教授をはじめ、世界的な水準の業績を上げた研究者は科研費に支えられ研究してきた。一方、平成27年度の筑波大の科研費は約37億円。日本の大学では8番目に多いが、東京大の約216億円や京都大の約140億円、名古屋大の約75億円に比べると半分以下だ。

平成 27 年度の論文引用数の得点（点）



「大学からの支援必要」

現在大学院で研究を行う学生は、自分の研究の環境や、ノーベル賞を目指すことについてどのように考えているのか。化学と物理を専攻する学生に聞いた。

化学

基礎化学を専攻する大学院修士課程の女子学生は、現在の研究の環境について「予算が少なく苦労することが多い」と話す。新しい実験機械や器具は高価で購入が難しく、他の国立大学では使い捨てする器具も洗浄して使わなければならない。「洗浄や器具の維持に無駄に時間がかかり、研究がなかなか進まない」と嘆く。

基礎研究で十分な研究費を取得するのは難しい。より多額の研究費を得るには、文部科学省などが指定するテーマを研究する必要がある。だが、そのテーマと自分の関心が一致しないこともあり、「指定されたテーマに無理やり研究対象を近付けるのはモチベーションの低下にもつながる」と話す。周りの学生は「企業で研究する方が給与が高く経済的に楽に研究に携われる」と、大学で研究職に就かずに企業の研究開発部門を志す人が多いという。「基礎研究の強みは新しいことを見出したり現象の本質を明らかにできること。応用されることで基礎にも目が向けられるのは確かだが、基礎あってこその応用だとも思う。基礎と応用のバランスが大切で、どちらも軽視せず支援してほしい」

筑波大からノーベル賞受賞者を輩出するには、「大学からの支援を更に増やすべきではないか。金銭的な支援はもちろんだが、若い研究員の負担の軽減が必要だ」と話す。女子学生によると、東京大学や京都大学などの旧帝国大学では、学部生の授業で実験する際、専門の研究技師がその準備を行う。だが女子学生の研究室ではサポートする人がおらず、准教授や助教の教員は授業準備のために研究の時間が減るという。

ノーベル賞を重視することは賛成だ。ノーベル賞を受賞すればメディアに取り上げられる機会が増え、研究者の地位が上がると考えているためだ。だが、「海外では受賞した研究の内容を詳しく説明されるが、日本では研究者の性格や思い出話ばかりが報じられる。これでは研究自体が評価されないのではないか」と話した。

研究室では学生たちが昼夜を問わず研究に取り組んでいる（10 月 15 日、自然系学系 B 棟で）＝井口彩撮影

「筑波大 研究に最適」

物理学

物理学専攻の男子学生は、「筑波大の研究環境は自分の研究にとって最適の場」と話す。

「昔から物理などの理論が好きで、特に電磁気学が好きだった」という。「自分が明らかにしたいことを調べていくうちに、電磁気学でなく素粒子理論を学ぶ必要があるとわかり、専門の教員を擁する筑波大の研究室に入ったという。

研究の対象は、素粒子理論のうち、素粒子によっておこる現象などを計算で求めるもの。この計算は非常に複雑なため、高性能のスーパーコンピューターを使う必要がある。筑波大学には1996年に当時世界1位の性能とされたスーパーコンピューター「CP－PACS」が設置され、素粒子物理学の数値的な研究で世界的な業績を上げた。現在は新型の「HA－PACS」がある。男子学生は「最新鋭の計算機があるおかげで納得のいく研究ができている」と話す。

男子学生は「ノーベル賞は数ある賞のうちの一つに過ぎないと思うので、受賞することが研究のゴールだとは考えていない」と話す。だが、「ノーベル賞の知名度が高いのは事実で、中高生が物理や化学などの研究分野を知るきっかけとして有用だと思う」とも語った。

研究に関して、大学の支援だけでは研究の方法、成果は大きく変わらないと考えている。「大学の支援も大切だが、実際に研究する人がどれだけ頑張るかの方が大事ではないか」と話した。

2012 年に導入されたスーパーコンピューター「HA－PACS」

73年物理学賞 江崎玲於奈名誉教授

創造的な研究に支援を

1973年にノーベル物理学賞を受賞し、92年から6年間筑波大学長を務めた江崎玲於奈名誉教授に、筑波大からノーベル賞受賞者を輩出するにはどうすべきか、電話で取材した。（聞き手・井口彩）

分野によっても変わるだろうが、これまでにノーベル賞を受賞した研究者たちは、世の中になかった創造的な研究の成果を挙げたことで受賞できた。そうした研究を進めれば、今後、筑波大の研究者も受賞できるはずだ。

大学は、創造的な研究や発明、発見を重点的に支援していく必要がある。そのような研究を進める人を大学内で公正に評価し、充分な研究費を配分することが不可欠だろう。

今年ノーベル賞を受賞した大村智氏は熱帯の風土病に対する特効薬を、努力を重ねて開発し多くの人々を救うことができた。梶田隆章氏は、その実態が謎に包まれていた素粒子「ニュートリノ」に質量があるという大発見を成し遂げ、物理学の理論を塗り変えた。

このように、ノーベル賞はさまざまな分野の飛躍的な研究成果に授与される。筑波大の研究者もこのような成果を出せば当然ノーベル賞が与えられるはずだ。

だが、研究者は必ずしもノーベル賞にこだわる必要はない。まずは未知の分野を開拓する研究をすることが大切だ。そこでもしチャンスに恵まれれば、私の場合もそうであったが、ノーベル賞に結びつくような大発見をすることができるだろう。

◆

江崎玲於奈（えさき・れおな）

1925年大阪府生まれ。47年東京帝国大学理学部卒業。56年から東京通信工業（現ソニー）の半導体研究室の主任研究員として勤務、59年に東京大学から博士の学位を授与された。73年に「半導体におけるトンネル効果の実験的発見」でノーベル物理学賞受賞。92～98年筑波大学学長。

産学連携が鍵

内田史彦教授

筑波大学の国際産学連携本部の内田史彦教授は「今年ノーベル賞を受賞した日本人の研究には共通点がある」と指摘する。企業などの産業界と、大学などの学術界が連携し研究を行ったことだ。ノーベル賞と産学連携の関係とは何か聞いた。

（聞き手・田中開）

企業と協力し研究の質向上

■ノーベル賞と産学連携

医学生理学賞を受賞した大村智氏は、静岡県伊豆半島で発見した新種の微生物から菌を採取し、分析した。その研究がドイツの製薬会社のメルク社に評価され、共同研究を開始。その結果生まれた薬が、熱帯地方で蔓延していた病気から約2億人を救った「インベルメクチン」だ。

物理学賞を受賞した梶田隆章氏は、岐阜県にある「スーパーカミオカンデ」という施設で素粒子の研究を行い、ニュートリノという素粒子に質量があることを証明した。スーパーカミオカンデは、月面から地球に向けて点滅させた懐中電灯の光を捉えられるほど高性能の光検出器「光電子増倍管」を使い観測を行うが、これは浜松フォトニクス（静岡県浜松市）に依頼して特注したものだ。

2人の研究のほかにも、2013年以降の日本人のノーベル賞受賞者の研究は、すべて産学連携が関わっている。

■筑波大の産学連携

今年度、筑波大学と企業との共同研究費は飛躍的に増加している。

筑波大は、国内の企業や産業技術総合研究所（産総研、つくば市梅園）など国の研究機関と積極的に連携してきた。昨年10月には産総研と資金を拠出して共同研究を行った。今年度からは、医学生理学賞の大村氏の連携先でもあるメルク社など、海外企業との共同研究を大幅に増やしている。昨年度は筑波大で盛んな医学分野に限り海外との連携を進めたが、来年度からは電気製品の海外大手メーカーなどとも連携する予定だ。これまで共同研究の規模は年間4億円程度で横ばいだったが、海外との共同研究を増やすなどして今年度は倍増する予定だ。

■筑波大の可能性

筑波大の強みは、複数の分野が融合した学際系の研究が多いこと。それを生かし今後は学際系の分野でも産学の連携を進めていく。

「ノーベル賞の対象になる研究は医学や物理学などに限られており、筑波大が強みとする学際系の分野と方向性が異なるのでは」との声もある。だが、ノーベル賞は新たな理論や物質を生み出すような「学問的な重要性」だけでなく、社会に与える影響の大きさでも評価される。例えば江崎玲於奈名誉教授の半導体の研究は、研究成果はもちろん、それまでの半導体の技術を大きく進歩させた点も大きく評価された。

学際系の研究は、革新的な研究成果が出ることが多く社会に大きな影響を与える可能性がある。産官学が合同で質の高い研究を行い、研究のレベルを上昇させれば、ノーベル賞級の優れた研究が増えるだろう。

視点

筑波大学からノーベル賞受賞者を輩出するのはかなり難しいのではないか、というのが取材しての実感だ。

今回の取材で、研究費の不足が特に深刻な問題だとわかった。取材した基礎化学を学ぶ女子学生は「研究費が少ないために新しい実験器具が購入できない」と嘆いていた。これでは、たとえノーベル賞級の知識や技能を持つ研究者がいてもその芽を摘むことになりかねない。

この現状を打開するには、内田史彦教授が言うように、産学の連携を強化すべきだ。企業と連携すれば研究費が得やすくなり、より充実した環境で研究できるだろう。

その際は、筑波大学の強みである研究学園都市という土地を生かすのが良いだろう。つくば市には、300以上の研究機関・企業と2万人以上の研究者がいる。こうしたネットワークを利用し、「チーム筑波研究学園都市」で力を合わせて一つの研究課題を解決すれば、ノーベル賞に少しでも近づくはずだ。

永田恭介学長は本紙の5月のインタビューで「平成24年度には約7億円だった他の研究機関との共同研究費を、今後6年間で約15億円まで伸ばしたい」と話していた。大学には、研究支援の在り方を熟考してほしい。

（井口彩）

研究学園都市を生かせ

HELLO! 先端科学

海底から噴き出すCO2

伊豆諸島の式根島で発見

地球上では現在、自動車の排気ガスなどが原因で、大気中の二酸化炭素（CO2）が増え続けている。CO2が水に溶けると水中の水素イオン濃度が低下し、水は酸性化する。酸性雨を生む一因だが、影響は海にも及んでいる。海面から溶け込むCO2の増加で、かつてない速さで海の酸性化が進み、生態系への影響が懸念されている。筑波大学下田臨海実験センター（静岡県下田市）のアゴスティーニ・シルバン助教（生環系）らは、海底からCO2が吹き出す一帯「CO2シープ」を伊豆諸島の式根島で発見したと今年7月に発表。海の未来像を解明すると注目されている。

シープ（seep）とは、何かが染み出る場所という意味。CO2シープでは、海底火山のマグマが周辺の石や土を燃やし生じたCO2が、気泡となって海底から噴き出し、海水に溶け込む。この一帯の海水はCO2を多く含み、通常の海域より酸性化が進んだ状態になるため、酸性化の進行が海の生態系に与える影響を調べられる。

式根島は海底火山の噴火で生まれた島で、今回発見されたCO2シープは島南部の御釜（みかま）湾と足付（あしつけ）海岸の2カ所。13年9月にシルバン助教らが式根島に隣接する新島に観光で出向いた時、「この辺りの海底に何かが噴き出している場所がある」という話を島民から聞いたことが発見につながった。2008年に地中海のシチリア島で初めて発見されて以来4つ目で、太平洋の温帯地域では初の発見。シルバン助教は「式根島のCO2シープと2100年ごろの太平洋は、酸性化の度合いが一致すると予測するデータがある」と語る。

本格的な調査は昨年6月に開始。同月に下田臨海実験センターに就航した最先鋭の調査船「つくばⅡ」を使用し、噴出する気泡に火山性の有毒ガスが含まれるか調べた。多量の有毒ガスが含まれる場合、酸性化の影響を正確に測定できないからだ。調査の結果、式根島のCO2シープには有毒ガスがほとんど含まれず、研究対象になると判明。今年7月にはCO2シープの発見と調査結果を発表し、注目を集めた。

現在は同センターの技術職員や学生と共に「つくばⅡ」の潮流計などを使い、島周辺の海流や海水温を調べたり、潜水調査で生息生物などのデータを採取したりしている。通常の海域と比較し、CO2シープと式根島の生態系との関係を探る。

これまでシチリア島などの他のCO2シープの研究で、酸性化した海ではサンゴや海藻が生息しにくいことが分かっているが、魚類などの海洋生物に与える影響はまだ不明だ。同助教は「生態系全体を対象に、太平洋温帯域での酸性化の影響を研究したい」と話している。

（田中開＝教育学類2年）

式根島沿岸の通常の海底（左）と気泡が噴き出すCO2シープの海底（右）。サンゴや海藻の生息状況の違いが一目で分かる＝シルバン助教提供

卒業生からの手紙

筑波で自分の軸を発見

自分の内面を見つめた

まさか自分が「卒業生からの手紙」を書かせてもらえるとは思いませんでした。筑波大学新聞は、在学中わずか1年間ですが編集に携わらせていただいた本当に思い出深い新聞なので、また紙面に載る機会をもらえてうれしいです。大したことは書けませんが、何か書いてみます。

私は2010年に第二学群比較文化学類を卒業しました。現在は某予備校で勤務しています（都合により名前は出せませんが、過去よりも未来よりも、今を大切にする予備校です）。私がいる部門は大学生向けのスクールで、社会人になる準備として、英語講座と企業研究セミナーを提供する仕事をしています。

大手予備校職員

八木悠気 さん

学生時代はというと、正に「ダメ大学生」でした。故郷の新潟県を飛び出したのはいいものの、新幹線の乗り換えで見た東京の人の多さに心が折れ、大学に着いてからは平砂宿舎のかなり悪い住環境に心が折れ、せっかく入った大学も、将来自分が何をやりたいのか分からなくて、ずっと悩んでいた気がします。

でも、いま振り返って、心から筑波大に入って良かったと思っています。理由は2つあります。筑波大の良さは、世俗から離れ、自分の内面を見つめる時間がとりやすいことだと思います。悩んでいた時間も自分を見つめる良い時間だったと思うし、そこで見つけた自分の軸となる価値観は、仕事を始めてからもほとんど変わっていません。

もう一つは、大学生だけで構成されているその特別な環境です。悩むことも多かったけれど、同じように悩んでいる人が周りにたくさんいました。東京の大学生と関わる今の仕事について初めて気が付きましたが、朝まで遊んだり語り合った経験は筑波大生だったからこその経験だったと思います。

最後に筑波大生の皆さんに伝えたいことがあります。それは、今の経験はきっとかけがえのないものなので、大学生活を楽しんでほしいということ。それともう一つ、筑波の環境は特別なので、たまには外に出たほうが良いということです。筑波大は良い意味でも悪い意味でも特別な大学だと思います。交通費は自己への投資だと思って、月に1回は都会に出て新しい何かを吸収すると良いと思います。

（平成22年度比較文化学類卒）

筑波自然図鑑

今年もカマキリに会うことができた。筑波大学の学生宿舎には、しばしば昆虫が迷い込んでくる。写真のハラビロカマキリには、一の矢学生宿舎の中で出会った。

ハラビロカマキリは、他のカマキリに比べずんぐりした体が特徴。自慢の鎌も太くがっちりしていて、なかなか格好いい。背中の羽の白い点で他のカマキリと見分けられる。このカマキリを見たことがなかったので、つくばで初めて出会いうれしかったのを覚えている。

宿舎の部屋で出会った時、このハラビロカマキリはほこりまみれだった。少しほこりを指で取ってから外に放して観察していると、カマキリは自分の脚や鎌を口でなめて掃除し始めた。面白かったので写真を撮っていると、気づいた頃にはほこりは全部取れて、奇麗な姿になっていた。カマキリと一緒にいると、楽しくてつい時間を忘れてしまう。（写真・文＝今田創、比文3年、野生動物研究会）

◇ハラビロカマキリ◇
撮影地＝一の矢学生宿舎

秋季関東大学1部リーグ

女子 2季連続の優勝

インカレに弾み

【青山学院大学記念館（東京都渋谷区）で林健太郎＝社会学類3年】9月から行われていた秋季関東大学1部リーグが10月18日に閉幕し、女子は8勝1敗で春季リーグに続く優勝を果たした。筑波大の春秋制覇は23年ぶりで、全日本インカレ（11月30日―12月5日）に向け弾みをつける結果となった。芳賀舞波（体専4年）が最優秀選手賞を受賞した。

バレー

筑波大は初戦の松蔭大戦から8戦目の青山学院大戦まで1セットも取られず、8連勝で優勝を決めた。全勝を目指し東海大との最終戦に臨んだが、1―3で敗北した。

第1セットは優勝校の勢いを見せつけた。井上愛里沙（同2年）、朝日優衣（同3年）の強烈なアタックや高さを生かしたブロックで得点を重ね、25―13で奪った。

チームに楽観ムードが漂った第2セット。東海大の素早い攻撃に苦戦、序盤からリードを許し、一時は7―16と離された。そこから粘り、じりじりと追い上げ18―21まで迫った。だが再び突き放され、20―25で今季初めてセットを落とした。

その後はサーブミスが相次ぐなど勢いを失い、第3セットを18―25で取られると、第4セットも東海大の勢いを止められず14―25で奪われた。

中西康己監督（体育系・准教授）は「今季はリードされても選手が落ち着いて次のプレーを考えることで、逆転することが多かった。だが東海大戦では、これから反撃という場面でミスを重ね、相手を勢いづかせてしまった」と振り返った。

強烈なアタックを決める井上（10月18日、東海大戦で）＝佐々木悠里撮影

記者の目

夏の練習の成果感じた

2季連続の優勝を果たした筑波大。秋季リーグを通して選手間の連携による多彩な攻撃が際立った。中西康己監督（体育系・准教授）は、「夏の練習で選手間のコンビネーションプレーを磨いた」と話す。

筑波大は全日本代表の井上愛里沙（体専2年）や代表歴のある帯川きよら（同4年）など、実力のある選手が多いことが強みだ。東海大のエース針生瑞希（3年）は「筑波大にはブロックの高い選手、強烈なアタックのできる選手が多い」とその手強さを語る。その力を生かし、春季リーグで優勝を飾った。

だが中西監督は「個人の力に頼り過ぎ、攻守の連携が弱いことが課題だった」と話す。井上のいるレフトからのアタックや帯川のブロックで得点を重ねたが、攻撃のパターンが少なかったのも事実だ。夏の練習では、ブロックとレシーブの連携や、センターやライトからのアタックに磨きをかけた。

強化は粘り強さにつながった。秋季リーグでは相手にリードされても、「攻撃のパターンが増えたため、取り返せるという自信があった」（帯川）。9月20日の嘉悦大戦では、第2セットで5点差まで離されたが、逆転してセットを奪うと勢いに乗りストレート勝ち。東海大戦でも負けはしたものの、9点差から3点差まで詰めよった。

だが東海大戦では課題も見つかった。東海大の強いサーブにうまく反応できず守備を崩されたことだ。またサーブミスも相次ぎ、「試合の主導権を相手に渡してしまった」（中西監督）。

東海大戦の試合後、土井さくら（同3年）は「何があっても揺るぎない自信が必要」と話していた。全日本インカレでは、6年ぶりの優勝を狙う。それまでに課題を克服できるか、自信を深めることができるかが勝利の鍵だ。（林健太郎）

果敢に攻め込む帯川（10月18日、東海大戦で）＝佐々木悠里撮影

3位で地区大会出場逃す
水野が初の首位打者

秋季リーグ

4割の高打率を記録しベストナイン、首位打者に選ばれた水野（10月18日、帝京大戦で）

野球

【バッティングパレス相石スタジアムひらつか（神奈川県平塚市）で前名裕一＝社会学類1年、写真も】首都大学秋季1部リーグの最終戦が10月18日に行われ、筑波大は帝京大に4―5で敗れた。最終成績は9勝5敗で3位。春季リーグから順位を二つ上げたが、関東地区大学選手権への出場は逃した。4割の高打率を記録した外野手の水野将吾（体専4年）が初の首位打者とベストナインを獲得。また三塁手の丹伊田翔（同4年）、遊撃手の板﨑直人（同4年）、外野手の汐月祐太郎（社学3年）もそれぞれベストナインに選ばれた。

帝京大戦に先発した野々村高志（体専4年）は、7回まで3塁を踏ませない好投を見せた。打線も四死球やワイルドピッチなど相手のミスを生かし、初回に2点を先制。5回にも1点を追加した。

だが8回から継投策に出ると、試合の流れが帝京大へ。2番手の大場遼太郎（同2年）が帝京大打線に捕まり2点を献上した。

筑波大は9回に1点を追加し再び突き放したが、その裏、今度は大場から代わった石黒敦也（同3年）が捕まった。単打を重ねられ1点を返されると最後は1死2、3塁から左前安打を浴び、ランナー2人がホームイン。サヨナラ負けを喫した。

川村卓監督（体育系・准教授）は「野々村は期待に応えてくれたが、5回あたりから疲れが見え始めていたので継投策をとった。だがそれが誤算だった」と悔やんだ。

また打率上位3人を独占しながらも優勝できなかった今季について、「試合の中で得たチャンスを確実に生かさなければならない」と反省点を挙げた。来季に向けては、「投手は一年間戦える体力をつけること、野手は試合の状況を判断し的確なプレーができるようになることを目標に、練習を重ねたい」と語った。

サッカー

【東京国際大学第一サッカー場（埼玉県坂戸市）で森脇慎、写真も】関東大学2部リーグの昇格争いが大詰めを迎えている。筑波大は10月24日の東京学芸大戦に1―0で勝利。すでに昇格を決めた日本体育大に次ぐ2位につけており（10月29日現在）、昇格圏外の3位・関東学院大とは勝ち点1差だ。小井土正亮監督（体育系・助教）は「11月の3試合ですべて勝つ。何としても昇格する」と話している。

関東大学2部リーグ

1部昇格へ正念場

決勝点を決めた主将の早川（10月24日、東京学芸大戦で）

東京学芸大戦では前半からボールをキープし、右サイドを中心に攻め立てた。31分、FW中野誠也（体専2年）が右サイドからゴール前にパス。FW若杉拓哉（同4年）が反応しボレーシュートを放ったが、わずかにゴール右に逸れた。

試合が動いたのは後半6分。右サイドのコーナーフラッグ付近でMF長澤皓祐（同1年）がドリブルで突破し、ペナルティエリア内のDF早川史哉（同4年）へボールを送った。早川はゴール左隅へ蹴り込み、決勝点を挙げた。

小井土監督は「無失点でチャンスを確実に生かす、今季の筑波大らしいサッカーができた」と語った。

記録ファイル

◆女子サッカー　関東大学女子リーグ戦（10月4日から、筑波大第一サッカー場ほか）筑波大0―3日本体育大▽筑波大0―6東京国際大（棄権試合）▽筑波大0―1神奈川大▽筑波大1―2慶應義塾大＝1勝6敗1分、勝点1、10位

◆陸上　◇日本ジュニア選手権（10月16―18日、瑞穂公園陸上競技場）

【男子】走高跳　平松祐司（体専1年）2メートル17＝2位

【女子】ハンマー投　江原宇宙（同1年）54メートル62＝2位

◇箱根駅伝予選会（10月17日、国営昭和記念公園ほか）10時間36分58秒＝22位

バドミントン

全日本学生選手権

女子団体が2連覇

全日本学生選手権が10月9―15日に大阪府立体育会館（大阪市浪速区）などで行われ、筑波大は女子団体で2連覇を達成した。個人戦では女子ダブルスで加藤美幸（体専2年）、柏原みき（同2年）のペアが優勝した。同ペアは全日本選手権本戦（11月30日―12月6日）の出場権を得た。

シングルス3戦、ダブルス2戦で争う団体戦。11日に行われた決勝では、昨年も決勝で対戦した龍谷大と顔を合わせた。一進一退の攻防が続き、決着は最終戦の第3シングルスの加藤に委ねられた。加藤は2セット続けて21―19で奪取し、優勝をつかんだ。

15日に行われた女子ダブルス決勝。加藤、柏原ペアは北翔大の4年生ペアを相手に、逆転勝利で優勝を決めた。

第1セットを先取され迎えた第2セット。19―20で北翔大ペアにマッチポイントを握られた。だがここから粘り逆転、23―21でセットを奪った。第3セットは21―14で危なげなく奪取。初の大学日本一に輝いた。

加藤は団体戦の決勝を振り返り、「集中してプレーできた。リラックスし、自信を持ってコートに立てた」と語った。

柏原は「団体戦2連覇、ダブルス優勝という目標を達成でき、とてもうれしい。全日本選手権でのベスト4を目標に練習に取り組みたい」と話した。（大西美雨）

全日本学生優勝大会

２年ぶりの日本一

林田 流れ引き寄せるコテ

剣道

【日本武道館（東京都千代田区）で石川泰行＝社会学類1年】大学団体日本一を争う全日本学生優勝大会が10月25日に行われ、筑波大が2年ぶり12回目（東京教育大時代の2回を含む）の優勝を果たした。決勝の鹿屋体育大戦では三将の林田匡平（体専4年）が二本勝ちし、そのリードを守り切った。

鹿屋体育大は昨年大会の準決勝で敗れた相手。先鋒戦から中堅戦までの4戦は、双方一本も取られない展開が続いた。緊迫した空気を三将の林田が切り裂いた。

開始2分半、相手の手元が上がったところを逃さずコテを決めた。その後、右肩が脱臼するというアクシデントがあったが、相手が飛び込んできたところを逃さず再びコテを決め、二本勝ちを収めた。

副将が一本負けし、勝敗は大将戦にもつれ込んだが、竹ノ内佑也（同4年）がしっかり守りきり引き分け、2年ぶりの栄冠をつかんだ。

鍋山隆弘監督（体育系・准教授）は「けがをした中でもしっかり2本目を取った林田は立派。去年は悔しい思いをしていたので、それを晴らせて良かった」と笑顔で語った。

決勝戦で守りに徹し、優勝をたぐり寄せた竹ノ内（右）（10月25日、鹿屋体育大戦で）＝森脇慎撮影

記者の目

4年生 有終の美飾る

「勝因は、4年生が勝負所でしっかり勝ってくれたこと」と鍋山隆弘監督（体育系・准教授）は振り返った。

今年の4年生は、昨年の全日本選手権を制した竹ノ内佑也（体専4年）、今年の全日本学生選手権覇者の林田匡平（同4年）を中心に実力者が揃う。今大会は、後ろ3人に4年生が座った。鍋山監督は「前半でリードされても、後半追いつけると思っていた」と信頼を口にする。

力が現れたのが中央大との準決勝。下級生の五将、中堅が敗北し、決勝進出には勝利のみという状況で副将の山下和真（同4年）、大将の竹ノ内がそれぞれメンを決めて一本勝ち。竹ノ内は代表戦にも出場、昨年の全日本学生選手権で優勝した梅ケ谷翔（2年）を相手にメンを決め、チームを決勝に導いた。

決勝でも4年生が躍動。林田は「下級生ががんばって自分に繋いでくれた。あとは4年生がなんとかしようと思った」。竹ノ内も「後輩と試合をするのもこれが最後。何としても優勝したかった」と語った。

4年生にとって今大会は大学剣道の集大成。力を存分に発揮し有終の美を飾った。（石川泰行）

専修大に雪辱果たす

現在リーグ戦3位

関東大学リーグ

バスケ

【慶應義塾大学日吉キャンパス（横浜市港北区）で大西美雨＝社会学類2年、写真も】10チームが2回戦総当たりで争う関東大学1部リーグ戦が9月5日から11月1日まで行われている。男子は10月29日現在、12勝4敗で3位につけている。

10月17日には専修大と対戦。リーグ1巡目で負けた相手だったが、101―64で快勝し雪辱を果たした。

筑波大は杉浦佑成（体専2年）の得点で先制すると試合の主導権を握り、26―9で第1ピリオドを終えた。第2ピリオドは村越圭佑（同4年）の連続得点などで、開始から5分で27点差に広げ試合を決定付けた。その後も流れは変わらず、第3、第4ピリオドでも着実に得点を重ねた筑波大は、今季初めて3桁得点の大台に乗せた。

前回の専修大戦では、第1ピリオドで24―6とリードしながら第2ピリオドで大量失点。逆転で敗北していた。村越は、「（前回逆転された）第2ピリオドでも安定して点数をとれたのがよかった。受け身にならず、積極的なプレーをしたい」と話した。

吉田健司監督（体育系・准教授）は、「ゲーム序盤にリードした勢いのまま試合を進めることができた。今後の試合でも筑波大の強みである、ボールを奪ってからの速攻を生かしたい」と語った。

杉浦＝写真＝らの活躍で試合を決定づけた筑波大（10月17日、専修大戦で）

男女共にベスト8

2年連続 準決勝行けず

柔道

全日本学生体重別団体優勝大会が10月24―25日にベイコム総合体育館（兵庫県尼崎市）で行われ、男女共にベスト8に終わった。

6月の全日本学生優勝大会で優勝した男子は2回戦からの参加。順天堂大、関西大を下し、準々決勝で東海大と対戦した。

先鋒の田中崇晃（体専3年）、次鋒の小林悠輔（同4年）が相次いで落とした。その後三将戦は竹内信康（同3年）が制したが、副将戦で新添悠司（同3年）が敗れて2年連続での準々決勝敗退が決まった。

女子は1回戦で同朋大、2回戦で金沢学院大に勝利。準々決勝の東海大戦では1―1で代表戦までもつれたが敗退した。

増地克之監督（体育系・准教授）は「全日本学生優勝大会で男子は優勝、女子も3位に入賞し、部全体にやりきったという雰囲気があった。今後は気持ちを切り替え、勝利への執念を取り戻さなくてはならない」と語った。（加藤未悠）

顔

競技の発展に貢献したい

パラバドミントン世界ランク10位

藤原大輔（体専4年）

8月4―7日にインドネシアで開催された障がい者バドミントン（パラバドミントン）の国際大会「インターナショナル」。下半身に重度の障がいを負うも義足などで立ってプレーするクラス「SL3」で、シングルス・ダブルス共に準優勝。SL3での世界ランクは10位（10月29日現在）、トップレベルの選手だ。

高知県出身。生まれてすぐ、医療事故による感染症で左足のほとんどを失った。だが引け目に感じることも無く、幼少期は友人と外で遊び、親の勧めで始めた水泳も、健常者と一緒に習った。

小学3年生で、友人に誘われバドミントンを始めた。中学・高校でもバドミントン部に所属し、ここでも健常者に混じって戦ったが、「勝つことも珍しくなかった」。

高校2年生の時、通院する神戸の病院で開催された障がい者と健常者の交流大会で、初めてパラバドミントンに触れた。SL3クラスではコートが通常の半面で、ラリーがより長く続いた。「駆け引きが楽しめる」と魅力を感じ、本格的に練習を始めた。

すぐに頭角を現した。半年後に日本選手権でシングルス準優勝、ダブルス優勝。3年生になると世界選手権に出場、シングルス、ダブルス、ミックスダブルス、団体戦の4種目で3位に輝いた。

「もっと高いレベルでやりたい。スポーツについて専門的に勉強したい」と筑波大に入学。だが思いとは裏腹に結果を残せなくなっていった。

障がいによるクラス分けが変更され、自分より軽度の障がいを持つ選手と戦うようになったためだ。

練習でも苦しんだ。日本でもトップレベルの力を持つ筑波大バドミントン部で、健常者と同じ内容に取り組んでいたため、負担が大きかった。

3年生の時、「世界のトップに勝つためには、自分に合った練習が必要」と思い、独自の練習法を模索するように。特に力を入れたのは、長いラリーに対応するための体力作り。専門書も専門のコーチも無く、監督やコーチ、他の部員から意見を聞きながら考えた。

努力はインターナショナルで実を結んだ。だが満足はしていない。「世界一になるにはまだ技術不足。試行錯誤を続けたい」

卒業研究では健常者と障がい者の動作の違いを分析。パラバドミントンの指導法の確立を目指す。現在日本の競技者の平均年齢は高く、人材の確保・育成が急務だ。「研究を進め、競技の発展に貢献したい」と話す。

パラバドミントンは2020年の東京パラリンピックの正式種目。5年後、表彰台に立つ姿を、この目で見たい。（社会学類2年＝山野辺拓実、写真は本人提供）

守備陣の隙つき快勝

連勝を飾る

ラグビー

【秩父宮ラグビー場（東京都港区）で山野辺拓実＝社会学類2年、写真も】関東大学対抗戦が9月6日から開催されている。筑波大は開幕から2連敗を喫したが、その後は復調し、2勝2敗で8チーム中5位（10月29日現在）。10月12日の早稲田大戦、25日の青山学院大戦で連勝を飾った。

早稲田大戦では、相手守備陣の隙をついた攻撃で得点を量産、45―25で快勝した。

前半序盤は互いにトライを奪い合う接戦だったが、10―10で迎えた17分、瀬尾優大（体専2年）がゴールポスト右へトライを決め、勝ち越した。その後も26分の亀山宏大（同4年）のペナルティゴール、28分の亀山雄大（同2年）のトライなどでリードを広げ、28―13で前半を終えた。

後半も筑波大が試合の主導権を握った。2分に鈴木啓太（同2年）、23分に亀山雄、27分に横山大輔（同4年）がトライを決めて試合を決定付けた。30分過ぎからは早稲田大の反撃を受けたが、1トライを奪われることどまった。

試合後、古川拓生監督（体育系・准教授）は「普段の練習の成果を発揮でき、体のぶつかり合いで負けなかったことが勝利につながった。だが完成されていないプレーも多いので、これからも練習を重ねたい」と話した。

ディフェンスを突破しゴールラインを目指す亀山雄大（10月12日、早稲田大戦で）

学生のマナー悪質

宿舎の清掃員に聞く

筑波大学の学生宿舎には共用の補食室、洗濯室、シャワー室、トイレがあるが、本紙の4月の取材で入居者から「利用マナーが悪い」という不満が上がっていることが分かった。宿舎の清掃員を務めたことのある女性に、居住者のマナーなどを聞いた。

（添島香苗＝生物学類3年）

女性によると、学生のマナーは「どの棟でも入居した直後は守られているが、大学に慣れてきた秋ごろから違反が目立ち始めた」という。

例えば補食室。学生宿舎管理事務所が発行する「学生宿舎の生活案内」には「補食室を利用したときは、生ゴミの処理を含む後片付けをきちんとしましょう」とあるが、女性は「常に私物が放置されていた」と話す。「汚れが付いた鍋や食器などがいつも置きっぱなしだった。軽く水ですすぎ『持ち帰るように』と書いた紙を近くに貼っても、片付けないままの人が多い」。私物だけでなく生ごみもよく放置され、虫が湧いていることもあったという。

シャワー室の利用マナーも悪かった。特に苦労したのは、髪を染めた後のシャワー室の掃除。女性は「染髪料が飛び散っており、落とすのが難しいので困った」と話す。他にも「髪の毛が詰まったままになっていた」「脱衣所の洗面台で髪を切り、周辺に髪の毛が散乱していた」などの迷惑行為を覚えている。

廊下も散らかっていた。同事務所発行の「学生宿舎入居者心得」には「フロアー、廊下に私物やゴミを置かないこと」とあるが、「ごみ袋やペットボトル、空き缶などを（廊下などに）大量に置いている人がいる。貼り紙で警告するがあまり効果はない」と語る。また、特に女子棟では個室のドアの前に靴を十数足も置いている人がおり、通行やウックスがけの際に邪魔になった。廊下を掃除する際はごみや私物をどかさなければならず、一苦労だったという。

同僚の清掃員の話では、他の宿舎でも状況は変わらなかったという。女性は「居住者全員がマナー違反をしていたわけではなく、特定の人が繰り返していたと思う。マナーをきちんと守っている人が、一部の人のせいで快適に生活できないのが気の毒だった」と話した。

廊下に置かれたごみ（上）、食器やごみが放置され貼り紙された補食室（下）（10 月 22 日、山野辺拓実撮影）

■取材を終えて

今回の取材で、宿舎でマナー違反を繰り返す学生の存在が浮き彫りになった。改善するにはどうすべきだろうか。

取材した女性は宿舎に住む上級生に「マナーの悪い新入生に注意してほしい」と頼んだことがあるが、「普段あまり話さないので難しい」と断られたという。私も2年間宿舎に住んだが、他の居住者との交流はほとんど無かった。

マナー違反を助長しているのは、こうした他の居住者に無関心な態度ではないか。同じ棟に住む人と少しでも交流があれば「嫌な気持ちをさせたくない」という気持ちが自然に生まれ、身勝手な行動は慎むようになるはずだ。

起業家育成イベント

社会人と事業考える

3日間で起業を疑似体験

するイベント「スタートアップウィークエンド（SW）つくば」が、10月16―18日につくばサイエンス・インフォメーションセンター（つくば市吾妻）で行われ、学生や社会人ら21人が参加した。

事業内容をチームで話し合う参加者（10 月 17 日、つくばサイエンス・インフォメーションセンターで）

SWは、2009年に米国シアトルで始まった起業家育成イベント。これまで世界の約800都市で1500回以上開催されている。日本でも09年から全国の20都市以上で行われており、つくば市での開催は初めて。NPO法人Startup Weekendが主催、筑波大学などが後援した。

1日目は、参加者が事前に考えた事業案を一人1分間で発表。「子どもの素質を調べる遺伝子診断サービス」や「一つの話題の流れが分かるニュースアプリの開発」など独創的な案が披露され、5つの事業案に賛同者が集まった。

2日目はチームに分かれ、具体的な事業内容を話し合った。筑波大在学中にIT系企業を創設した黒崎賢一さん（メ創4年）ら経営者のアドバイスや街頭で聞いた市民の要望を基に、事業にかかるコストや対象とする顧客層などを議論した。最終日は、各チームが最終的な事業案を発表。経営者らの審査の結果、「学生が興味のある企業の社員とネット上で会話できるサービス」を提案したチームが優勝した。

イベントの進行を務めたNPO法人の担当者は「他都市で開催した時に比べ、専門性の高い事業案が多く驚いた」と話した。

参加した今川裕士さん（CS2年）は「普段あまり接しない社会人の参加者と一つの事業を作り上げるのが新鮮だった。このチームで本当に起業できるのではないかとわくわくした」と話した。イベントは、来年5月に再びつくば市で行われる予定だ。（添島香苗、写真も）

抜け毛の原因に驚き

参加者が活発に議論

筑波大学大学院生命環境科学研究科・生物学類が主催する「バイオeカフェ」が10月6日、BiViつくば（つくば市吾妻）で行われた。95回目の今回は「毛のはなし～あなたは脱毛？育毛？～」をテーマに古田淳一講師（医学医療系）が講演。毛にまつわるクイズや、指定されたテーマをグループで話し合う「テーブルトーク」などを交え、参加者は楽しみながら毛について学んだ。

古田講師は筑波大学附属病院の皮膚科医で、皮膚のアレルギー疾患や乾癬（かんせん）の治療が専門。

古田講師が抜け毛の仕組みについて「円形脱毛症の最大の原因はストレスではなく自分の毛根のアレルギーだ」という話をすると、会場からは驚きの声が上がった。自然治癒やステロイド剤を使った治療方法の詳しい説明もあり、参加者は男女を問わず話に聞き入っていた。

テーブルトークでは「髪の悩みはあるか」「脱毛について」などのテーマが出され、参加者は活発に議論した。その後、「ノンシリコンシャンプーは本当に頭皮に優しいのか」「さまざまな脱毛グッズにはどんなものがあるか」など多くの意見が飛び交い、古田講師は「ほとんどのシャンプーには化学製品が含まれるのでシリコンが特に髪に悪いわけではない」「脱毛器には光脱毛とレーザー脱毛の2種類がある」と解説した。

講演中、クイズに手を挙げて答える参加者（10 月 6 日、BiVi つくばで）

参加した女子学生は「円形脱毛症の原因がアレルギーだということに驚いた。テーブルトークで、男女で髪の毛の手入れの仕方が大きく異なることが分かり面白かった」と話した。

（佐々木悠里、写真も）

外国人留学生懇談会

和太鼓の演奏も

今年入学した留学生と教職員の交流を深める外国人留学生懇談会が10月16日に第二エリア食堂で行われ、600人以上が参加した。

はじめに玉川信一副学長（学生担当）があいさつし、留学生を歓迎した。ベントン・キャロライン副学長（国際担当）が乾杯の音頭を取った。

会の合間に音楽サークルが演奏を披露し、参加者を楽しませた。

吹奏楽団は筑波大学のメッセージソング「IMAGINE THE FUTURE ～未来を想え」を演奏。次に和太鼓演奏サークル「ときめき太鼓塾」が2曲を披露した。2曲目の「いろどり」という曲では、さまざまな種類の和太鼓に加え、篠笛や小さなシンバルに似た楽器「チャッパ」などを使った。会場からは手拍子や掛け声が起こり大いに盛り上がった。

参加したエジプト出身の女子学生は「太鼓の演奏を聴いたのは初めてだったが素晴らしかった。演奏者が心から楽しんでいる様子が伝わってきた」と話した。

（佐々木悠里、12面に関連写真）

留学生の目

日本人の「切り替え」に感動

ヴォスラル・マテイ

日本に来たのは昨年4月、19歳の時だった。大阪大学にある留学生用の施設で日本語や日本政治・経済と日本史を1年間習い、今年筑波大学に入学した。大阪で交流したのは留学生ばかり。日本の文化をたくさん経験したとはいえ、日本人との接触は少なかった。それに日本人と友人になったとしても、親しい関係を築く機会があまりなかった。

ただ、欧米人と日本人のセンスが根本的に違うということはわかっていた。また、日本人は他愛のない話をするのを好むというイメージが強かった。

同世代の日本人との付き合いが少なかったため、筑波大に入学後、日本人とうまく付き合っていけるかずっと心配だった。違う環境で育った人との共通点を見つけ、真面目な話をするのが難しいと予想していたからだ。

だが、すべて杞憂だった。筑波大に来てすぐ、たくさんの日本人の友人ができた。確かに、日本人は他愛のない話をするのが好きだが、それはそれで楽しいし、そういう話に対して誰かがいきなり「私はそれは違うと思う」と言ったら、そこから真面目な議論が始まる。しかもその議論は、相手の考えを尊重し合い、とても冷静に行われる。

「ヨーロッパなら、こんなに早く態度を切り替えると逆に真面目すぎて格好悪く見られてしまう」と、日本人との交流を振り返って感動した。

こういう切り替えは日本人の国民性の大切な要素だと思う。関東に来てから地震を体験する頻度が増え、日本人が地震で慌てる様子をよく目にしていたが、勉強や仕事で使うサテライト室で大きな地震を体験した時、筑波大生は「あ、地震だ」と言うように少し頭を上げ、またおのおのの仕事に戻った。このテンションの差は間違いなく、日本人は真剣な時とそうでない時の間の切り替えがうまいことの証拠だと思った。

大学卒業後は母国で日本語の先生になるつもりで筑波大に来たが、日本人と毎日触れ合う中で、入学から2週間も経たないうちにずっと日本に住みたくなり、今は英語の先生になるための勉強をしている。

そう考えた理由は、日本がとても住みやすい国というだけでなく、日本人と仲良くなれば最高に楽しいということが分かったからでもある。（日本語・日本文化学類1年＝チェコ出身、原文も日本語）

東北の料理と酒を味わう

復興活動を伝える展示も

11の酒造業者が参加

筑波大学生や東北の酒造業者らが東北地方の食材を用いた料理や酒の販売などを行う「食と酒　東北祭り」が、10月17―18日につくばセンター広場（つくば市吾妻）で開催され、多くの来場者でにぎわった。

東北の地酒を振る舞う酒造業者（10月17日、つくばセンター広場で）＝食と酒 東北祭り実行委員会提供

身近な食と酒を通し、東日本大震災で被災した東北地方の魅力を知ってもらうことがねらいで、今年で2度目の開催。被災地の11の酒造業者が作る地酒や、東北の食材を用いた料理が振る舞われた。

会場には、実行委員会による被災地の古民家保存活動などを伝える展示物や、来場者がイベントの感想を書き込むメッセージボードも設置された。筑波大の応援団「WINS」の発表や有志によるヒーローショーなども披露され、会場を盛り上げた。

実行委員会副代表の藤田朋花さん（比文3年）は「東北に行き酒造業者に参加をお願いするなど一から自分たちでイベントを作ってきたが、うまくいかないこともあり大変だった。東北に興味を持つきっかけになればうれしい」と語った。

（前名裕一）

映画上映会を開催

震災復興伝える

東日本大震災の被災地の現状を描いたドキュメンタリー映画「僕らはココで生きていく」の上映会が10月16日に2C棟で行われた。比較文化学類が主催する比文プロジェクトの一環。

映画は、震災1カ月後から岩手県出身のシンガーソングライターが被災地の住民と協力し炊き出しなどの活動をしてきた「いわて三陸復興食堂」という復興支援プロジェクトを取り上げたもの。撮影時間は約800時間にも及び、被災者が震災から立ち直っていく姿を克明に描いている。

上映後には、下山和也監督や映画に出演した被災者と参加者が交流。下山監督は「被災地に行くたびに自分自身が元気をもらっていたので、元気が出るようなドキュメンタリーを作りたかった」と話した。また比較文化学類の学生は「現地では復興に向け頑張っている人がいると改めて分かり、勇気づけられた」と感想を語った。一方、マレーシア出身の学生は「（震災から4年半がたった）現地の詳細な様子が分かった」と話した。

上映会を企画した木村周平助教（人社系）は「参加者は真剣に語り合っていた。好評だったので、また学内で上映会を行いたい」と話している。

比文プロジェクトは、学生が発案した活動を教員や職員が支援し実現するもので、2013年から始まった。これまでに映画上映会のほか、就職活動の相談会や卒業生と交流するイベントなどを行っている。

（井口彩）

上映会後、監督や出演者と話し合う参加者たち（10月16日、2C棟で）＝木村周平助教提供

日本とウズベクの文化交流

民族舞踊と音楽を披露

筑波大学タシケントオフィスが主催する「ウズベキスタン・日本文化交流の夕べ」が10月23日に大学会館で開催された。日本人学生とウズベキスタンの留学生の交流を深めるのが目的で、会場にはウズベキスタンからの留学生など学内外から約150人が訪れた。

タシケントオフィスはウズベキスタンの首都タシケントにあり、中央アジアの学生や研究者との交流・共同研究を推進している。

特に注目を集めたのは、ウズベキスタンの民族衣装を着て登場した中村瑞希さん（人文4年）。中村さんは今年4月にタールスタン共和国で行われた「タール語オリンピック」で入賞。参加者から「ウズベキスタンの魅力は何か」と尋ねられた中村さんは「面倒見がよく親切な国民の人柄ですね」と笑顔で答えた。

中村さんはウズベキスタン民謡を熱唱。曲は、古来親しまれてきた「チャイハナ」と「ナマンガンオルマシ」。留学生らは歌を口ずさんだり手拍子をして故郷の歌を楽しんだ。

その後、水戸市などで活躍するダンス団体「シルクロードダンスアンサンブル」がウズベキスタンなどの民族音楽に合わせて民族舞踊7演目を披露。衣装の布を振り、流れるようなダンスで会場を魅了した。

イベント後、中村さんは「ウズベキスタンの音を感じてほしかった。今後も中央アジアの魅力を発信していきたい」と話した。

主催者の小野正樹教授（人社系）は「筑波大はウズベキスタンから50人以上の留学生を受け入れている。日本人学生との交流を深めてもらいたい」と話した。（山野辺拓実、写真も）

民族衣装を着てウズベキスタン民謡を歌う中村さん（10月23日、大学会館で）

探訪 tanbō

弓道同好会春霞（かすが）

大会優勝に狙い定める

春日キャンパスの弓道場。弓を構えるやいなや、それまで談笑していた若者たちの表情は、真剣なものに切り替わった。28㍍先、直径36㌢の的。射手からは、ほんのコイン大ほどにしか見えないそれを狙うためには、高度な集中力が求められる。

的に向かい両足を開く「足踏み」、弓を引ききる「会」、そして矢を放つ「離れ」……。若者たちは射終わった後もしばらくの間、微動だにしなかった。技の後も油断していないことを示す「残心」とよばれる所作だ。

現在、会員は約70人。

的に狙いを定め弓を構える会員たち（10月21日、春日弓道場で）

練習は週4回で、月に1回会員同士で腕を競う「月例会」を開く。外部からコーチを招き指導を受けることもあるほか、年2回、合宿も行う。会員は初心者から段位所有者までいるが、代表の上杉俊太郎さん（人文2年）は「（初心者は）弓を構える姿に憧れて入会する人が多い」と話す。

初心者の場合、練習では初めから弓を握らず、2、3カ月間、弓の持ち手部分の形をしたゴム製の道具を使う。弓道では、矢を正確に当てることはもちろんフォームの美しさも重視する。そのため実際に的を狙う前に、「足踏み」「会」「残心」など「射法八節（しゃほうはっせつ）」と呼ばれる一連の動作を体に覚えさせる。

この後は、一つの的に連続で矢を放つ「射込（いこ）み」などで腕を磨く。油野登梧さん（工シス1年）は「最初は弓に慣れず、よく指の付け根に傷ができた」と話す。また柿沢涼美さん（社学1年）は「基礎を練習する期間が長い分、初めて自分で矢を放った瞬間の喜びは大きかった」と振り返る。

目標は大会での優勝だ。春と夏の年2回、東京大学や学習院大学など首都圏の大学の弓道サークルで競う「九団体戦」に出場する。団体戦は3～5人のチームで一人4回ずつ矢を放ち、的に当たった合計回数を競う。昨年夏まで3回連続で優勝したが、今年は春夏続けて準優勝に終わっており、打開を目指す。

礼儀作法が重んじられるのは弓道の特徴だ。会員は弓道場に入る時にまず一礼。また、的に刺さった矢を片付ける会員には必ず「ありがとう」と声をかける。だが堅苦しい空気はない。

油野さんは「仲間と励まし合いながら楽しく練習に取り組めている」。的と向き合う瞬間は一人だが、仲間の存在が彼らを強くしている。（加藤未悠＝社会学類1年、写真も）

催事

MC展

11月17日（火）―23日（月）につくば美術館（つくば市吾妻）で開催される。

筑波大学大学院の人間総合科学研究科の博士前期課程で芸術を専攻する学生らが洋画や日本画、版画を制作し、発表する。

開催時間は午前9時30分から午後5時までで、最終日は午後2時で閉館。

混声合唱団定期演奏会

12月19日（土）にノバホール（つくば市吾妻）で開催される。午後4時半開場、午後5時開演。

Y・ブラームス「四重唱曲集」や髙田三郎「わたしの願い」など演奏予定。

チケットは前売り券が400円、当日券は500円。

問い合わせ＝http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~konsei/blog/

Who's Who?

つくば国際スポーツアカデミーの１期生

髙橋美穂子さん（体育１年）

息子の拓志くんは、もうすぐ１歳の誕生日を迎える
（10 月 14 日、一の矢共用棟前で）

9月30日の大学会館。今年新設された大学院博士前期課程の専攻「つくば国際スポーツアカデミー（TIAS）」の入学式に参加し、新たな人生の扉を開いた。同アカデミーではスポーツイベントの運営やアンチ・ドーピングなど、スポーツに関する分野を幅広く学ぶ。

幼い頃から体を動かすのが好きで、よく近所の男の子たちに交ざって草野球をしていた。中学ではソフトボール部に入り、県大会準優勝などの成績を残した。だが、大会や合宿で全国レベルの選手たちと関わるうちに、自分の実力に限界を感じ、将来は指導者としてソフトボールに関わりたいと考えるようになった。

高校では競技から離れ、学業に専念。2001年に、念願だった筑波大学の体育専門学群に入学した。再びソフトボール部に入り練習に励みながら、講義で効果的な指導法を学んだ。

3年次には休学してソフトボールの強豪国アメリカに渡り、短期大学のチームでプレーした。「指導者の意見が絶対」という空気がある日本とは対照的に、指導者と選手が積極的に議論を交わしており刺激を受けた。指導法を更に深く学ぶため、大学卒業後は筑波大学大学院人間総合科学研究科の体育学専攻に進学。プロの指導者を目指して突き進んでいた。

だが、05年7月に転機が訪れた。競技人口の少なさなどが理由で、08年の北京五輪を最後にソフトボールが正式種目から外されることが決まったのだ。「ショックだった。ソフトボールから離れていく選手がいるかもしれないと思った」

大好きなソフトボールをなんとか盛り上げたいと、改めて自分の将来を考えた。競技の魅力を多くの人に伝えられる職業を模索し、新聞記者を目指すことを決めた。図書館に通い、それまではあまり目を通さなかった新聞を何紙も読む日々が始まった。

努力は実を結び、07年の大学院卒業と同時に産経新聞記者としての道を歩み始めた。翌年の北京五輪では、ソフトボール日本代表の上野由岐子投手への取材や、専門家による決勝戦の分析記事を担当した。

取材で全国を駆け回る中で特に印象的だったのが、11年3月の東日本大震災の取材だ。発生後すぐに被災地を訪れたものの、未曾有の災害に見舞われた人々の口は重く、思うように話を聞けないことが多かった。

スポーツの魅力伝えたい 東京オリンピック見据え

だが継続して現地に足を運ぶ中で、誰もが目を輝かせた話題があった。宮城県出身のフィギュアスケート選手・羽生結弦が、昨年2月のソチ五輪で日本人男子初の金メダルを獲得したことだ。「見る者に勇気や希望を与える、スポーツの力を感じた」と振り返る。

TIAS設立を知ったのは昨年5月。取材の経験から「スポーツが持つ可能性を学んでみたい」と、強くひかれた。息子の出産を控え、仕事と育児の両立に不安を抱えていた時のことだった。夫や上司と何度も話し合い、悩み抜いた末に、記者を辞めて学生として再出発することを決意した。

昨年11月に息子の拓志くんが誕生した。現在は、大学院で学びながら育児に奮闘する日々を送っている。「東京五輪の広報官になってスポーツの魅力を発信したり、世界でスポーツを通じた社会貢献を推進したい」

（岡田優太＝社会学類1年、写真も）

編集後記

今号では筑波大学が始めた「大学版ふるさと納税」を紹介しました。大学への寄付に対しワインなどが贈られるもので、大学初の取り組みとして注目されています。でも、筑波大のユニークな取り組みはこればかりではありません▼10月に亡くなった山田信博・前筑波大学学長は2009年の就任直後から、ブランディングを推進しました。その中で生まれたメッセージソング「IMAGINE THE FUTURE ～未来を想え」は大きな話題になりました▼今号では、筑波大が世界大学ランキングで順位を落としたことや、筑波大出身のノーベル賞受賞者の不在も取り上げましたが、1面の宇宙実験のように筑波大は最先端の研究も日夜行っています▼多くの人が知らないことを知らせることが報道の責務。これからもさまざまなことを伝えていきます。（副編集長・新田萌夏＝社会学類3年）

次号は **12月7日（月）** 発行予定です

学内総合

ハイレベルフォーラム

LED を掲げながら講演を行う名古屋大学の天野浩教授
（10 月 27 日、大学会館で）＝佐々木悠里撮影

２面へ

スポーツ

全日本学生剣道優勝大会

日本一に輝いた筑波大学剣道部（10 月 25 日、日本武道館で）＝森脇慎撮影

９面へ

学生生活

外国人留学生懇談会

留学生を歓迎するときめき太鼓塾のメンバー（10 月 16 日、第二エリア食堂で）＝佐々木悠里撮影

10 面へ

学生生活

食と酒 東北祭り

応援ステージを披露する WINS のメンバー（10 月 18 日、つくばセンター広場で）＝食と酒 東北祭り実行委員会提供

11 面へ